
魔法少女みぞれ マギカ

草木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女みぞれ マギカ

【Nコード】

N2267Y

【作者名】

草木

【あらすじ】

アニメ『魔法少女まどか マギカ』の二次創作作品です。

プロローグ

> i 3 4 1 6 0 — 4 3 3 7 <

草花の手入れをしようと自宅の庭に立ったとき、陶子はかすかな違和感を覚えた。

庭がやけに薄暗く感じる。

首を傾げて花壇を見つめる。パンジーの花びらに、黒いシミのようなものが付着しているのに気づいた。

土や泥で汚れたのだろうか？

不審に思っ指でこすってみたが、どれだけ強くこすろうとシミは落ちなかった。

目がおかしい。見慣れたはずの庭が、どこか自分の知らない場所のような感じがして、背筋がぞつとした。

「……陶子さんの目は、成長するにつれてじょじょに視力が落ちていきます。この病気は成長期のお子さんの場合、たいへん進行が早いものでして、おそらく数年以内には」

大学病院の医師は、パソコンのモニタを見ながら陶子の母にそう説明をした。

「……全盲になると？」

「いえ、その可能性は低いでしょう。しかし、じきにメガネやコンタクトではカバーしきれないほど視力が低下します」

弱視、という用語を聞いたのはこのときが初めてだった。

目が見えなくなる不安と、それでも完全に見えなくなるわけではないと判明した安堵がせめぎ合って、陶子はしばらく放心した。

むしろ激しく動揺したのは母の方だった。

医師の言葉を、まるで末期がんの告知のように受け取ったらしい。「治す手立てはないんですか？ 陶子はまだ十二歳なんですよ？

この歳で失明なんて、そんなのって」

「お気の毒ですが……」

母のあまりの剣幕に、医師も絶句した様子で言葉尻を濁した。失明じゃないよお母さん、と言おうとして陶子は口をつぐんだ。母の顔がひどく青ざめていた。

目つきは虚ろで、目尻に涙の粒がうつすらと浮かんでいる。

大人がそんな風に泣くのを見るのは初めてだった。

自分より先に泣かれてしまったからか、陶子は胸の辺りが冷たくなるのを感じた。

まるで病気に罹患したのは本当は母で、自分は慰める立場なのに言葉を失って絶句しているような、ちぐはぐな気分だ。

「症状の進行を遅らせるための処置は、できるかぎり行っていきたいと思います。ただ、あくまで対処療法ですので、今後のことはご家族の方ともよくご相談頂いて……」

事務的な口調でねんごろに語る医師の言葉が、やけに遠のいて聞こえる。

大人二人の沈痛な面持ちが、悪趣味なコント的一幕のように感じられた。

当事者であるはずの自分は、その辛気くさいコントを眺める無愛想な観客のような達観した気分だった。

それから陶子は点字を習いはじめた。

点字の基本的な読み方から、パンチカードへの打ち出し方まで、両親と一緒に学んだ。

学校がひけると、おそろおそろといった足取りで（杖は最後の手段だ）自宅まで帰る。それから夕飯の時間まで、親子でみっちりと点字を覚えた。

遠からず、陶子は杖や誰かの手助けなしには満足に外を歩けなくなる。

光彩にあふれたこの世界から閉めだされ、好きな草花を眺めることすら叶わなくなる。

まっくらな世界で何十年も生きるのは、どんな気分なんだろう。

医者に宣告されてから、陶子は毎晩のように夜の闇の中でその世界を想像し、慣れようと努めた。

だが、暗い部屋の中にひとりでいると、不安の波が押し寄せてきて胸が苦しくなる。叫びだしたい衝動に駆られて、思わず部屋の電灯のスイッチに手が伸びる。

今すぐスイッチを押して部屋を明るくしたい。蛍光灯のやさしい光で、不気味な闇を消してしまいたい。

恐怖心から指先に力がこもる。

だが、押さない。

押せない。

今は明かりをつけることで暗闇から逃れられるが、光を感じられなくなったら、その暗闇からは二度と逃れられない。

慣れなくちゃだめなんだ。

慣れないと、闇に押し潰される。

受け入れるんだ。

この闇が、この先のわたしの人生の一部なのだと。ともだちなのだ。

そう自分に言い聞かせて、胸をばくばく鳴らし、脂汗をかきながら布団の中で息をひそめた。

敬虔な修行僧のような、ひたむきな祈る気持ちだった。

夏の終わりの蒸し暑い晩のことだった。

その日、陶子の両親は、仕事の関係で都内のホテルのパーティーに出かけていた。陶子は家で静かに寝転んですごしていた。

この頃になると、陶子の瞳はほとんど光を読み取らなくなってしまう。医師の予想を上まわる速度で、どんどん目の病が進んでいた。

二学期は、もう無理かな。

ソファーに寝そべりながら陶子と思う。

杖を突きながら通学したとしても、遅かれ早かれ手引きなしには満足に通えなくなる。だったら、夏休みを境に消える方がまだ。その方が後腐れなくていい。智恵里やクラスの女子から同情されるのはもうたくさん。

最後の最後まで迷ったが、ようやく決心がついた。両親が帰ってきたら、二期から別の学校（母がパンフレットを貰ってきた。読めないけど、おそらくは特殊な学校の入学案内だ）へ通うと伝えよう。

きつとそこなら、杖を突いて登校する自分がわる目立ちすることもなく、静かに暮らしていける。同情されないで済むのだ。

そう決めると、なんだか肩の重荷がすっと落ちたような気がした。音楽でも聴こう。

陶子はCDラックの前に立ち、指先でCDケースの表面をなぞってゆく。

ケースの背表紙には点字シールが貼りつけてある。陶子は指先でそれを読んで目当てのCDを選び出した。

ヴィヴァルディの『四季』。

CDをプレーヤーにかけ、響きわたるバイオリンの旋律に耳を傾けていると、ふいに台所の食器がかちゃと鳴った。

「……誰？」

「お邪魔したかい？」

どことなく甲高い声が目の前のソファから聞こえた。

いつの間に入ってきたんだろうか。

陶子は体を硬くして、すがろうとしてCDラックに片手をつく。

「貴方は誰？ どこから入ってきたの？」

「……キミはボクが怖くないの？」

「怖くないわ」

そう答える言葉に一抹の恐怖が混じっている。だが取り乱してはいない。自分自身の落ち着きぶりが不可解だ。

「玄関の鍵はどうしたの？」

「さてね」

「ピッキングしたのね」

「まさか」

どこことなくおどけるような口調。

「来海陶子^{くるみこうじ}。キミの目に、ボクはどんな風に見えるのかな？」

「わたしの名前を知ってるのね」

「ずっと前からね」

弱視の闇の中で何かがうごめく。

蛍光灯の微弱な光の下では、陶子の目にはほとんど見えない。ただ、声の聞こえる高さから、相手が小柄な存在なのは判る。猫ほどの大きさだろう。

「ねえ、何かボクに力になれることはあるかな？　ボクなら、きつとキミの力になることができると思うんだ」

「無理よ」

「無理かどうかは試してみなくちゃ分からないさ。来海陶子、キミはふたたび視力を取り戻したいと願っている。そうだろう？」

「……」

陶子の目の前で、それが語る。

黒く不気味な正体不明のそれが。

「……わたしの願いを叶えられるの？」

声がうわずる。

「もちろん。キミが心から望むのなら、ボクはどんな願いでも叶えてあげられるよ」

それはテーブルを飛び降りると、つかつかと歩み寄って近くに寄ってくる。

「だから陶子」

目と鼻の先から囁きかける。

「ボクと契約して、魔法少女になってよ」

ブログ（後書き）

表題画像はまどか マギカ風タイトルロゴジェネレータ
p:/magi.md/ を利用させて頂きました。
htt

1話

ジリリリッ！

枕もとでやかましく鳴る目覚まし時計を止めると、千秋みぞれは大あくびをした。

時計が午前五時を指し示している。

「五時起きかあ」

やっぱり外まっくらだ。

カーテンをひいて窓を開いた。

夜明け前の空は空気が澄んでいて、空が寒々しいまでの蒼さだった。夜気がひんやりと冷たく、パジャマ一枚だと寒気がする。

「がっこ行く仕度しよ」

みぞれは寝癖まみれの頭を撫でつけると、もう一度小さくあくびをして学校に出かける準備をすることにした。

小学生の頃ならともかく、今年から中学生なのだ。いつまでも母親に起こされていては、恰好わるすぎる。

中学生になったら、朝練で六時前に家を出るのなんて普通普通。せっかく部活に入っただんだもの。

精一杯頑張んなきゃ。

みぞれはついついベッドに戻りたくなる誘惑を断ち切って、えいっと気合を入れると、洗面所で顔を洗った。

みぞれの自宅から中学までは、JRで二十分ほどの距離だ。

家の近くの公立中学なら歩いて七、八分程度の場所にある。

だが中学受験をしたみぞれは、見滝原市の隣の宿輪台市にある私立中学まで毎朝電車通学をしている。

「次は宿輪台、宿輪台。お出口は右側になります」

鼻にかかったようなアナウンスが聞こえて、うとうとしていたみぞれははっとした。たかだか二十分程度なのだから寝ない方が良く

のだが、朝が早いとどうしても眠たくなる。

ドアが締まるギリギリのところであらうじて電車から飛びだし、みぞれは大きく息をついた。

「危ないところだった」

「あら千秋さん。早いね」

「来海先輩！」

ホームの端の方から、おなじ制服に身を包んだ長身の少女が近寄ってきた。

「おはようございます！」

「おはよう。千秋さんは毎朝元氣一杯ね」

陶子はあでやかな微笑を浮かべる。

「朝、早くてつらくない？」

「ぜんっぜん大丈夫です！」

「本当に？」

陶子は目を細めると、みぞれの胸もとへ手を伸ばした。制服のタイが曲がっている。朝、眠いのを我慢してひいこら身支度をしてきたのが、これでバテてしまった。

「こ、これはその」

「我慢はだめよ。早朝の水やりなら、わたしと智恵里だけでじゅうぶんだから。貴女はもう少しゆっくり来てもいいの」

「で、でもわたし」

「心配しないで。貴女が部長になる頃には、嫌でもこの時間に出てくることになるんだから。夏場は特に、ね」

そう言って陶子は意味深なウイंकをする。

みぞれがきょとんとしていると、

「さ、行きましょう。智恵里が待ってるわ」

「はい！」

みぞれは陶子に寄り添うようにして歩きだした。

鴨東中学三年、来海陶子はみぞれの憧れの女性だった。

容姿端麗、成績優秀。運動神経も抜群で、五月の最初の球技大会では、ソフトテニスに参加して、並み居るテニス部の部員たちをくだして見事優勝した。

小学校時代、ジュニアテニスのスクールで鳴らただけあって、陶子のテニスの腕前は相当なものだ。

県大会に出るような強豪部ならまだしも、その辺の弱小テニス部程度では相手にならない。

「でも、なんだか勿体ないです」

「どうして？」

「だって、先輩の腕前なら絶対全国を狙えますよ。それなのにわざわざ地味な園芸部を選ぶなんて」

「宝の持ち腐れ？」

「べ、別にそんな意味で言っただけじゃ」

「ふふ、千秋さんて面白いわね」

陶子は少し意地わるく微笑した。

全国クラスのテニスの腕前を持ちながら、だが中学に進学した彼女が選んだのは、廃部寸前のしがない園芸部だった。

もともと庭いじりが好きだったのだが、小学校六年の頃にラケットを手放してからは、園芸一本槍だった。

「今ではテニスへの情熱はほとんどないの。たまに気晴らしでやる程度ね」

「気晴らしに負けるなんて……うちのテニス部弱すぎ」

「彼らはほら、ちょっと練習不足だから」

練習不足どころか、ここ数年、ほとんどテニスをしてこなかった陶子が言っただけ。

先輩、ほんと勿体ないな。

テニスプレイヤーとして活躍する陶子を応援したかった気持ちもある。

だが、もし陶子が園芸部ではなくテニス部に入部していたなら、みぞれがこうして陶子と親しくなる機会はなかった。お互いに別々

の道を歩んだはずである。

「どうしたの千秋さん？」

「うつん、なんでもないです。ただ、先輩が園芸を選んだのが嬉しくて」

陶子がテニスを諦めたからこそ、こうして園芸を通じて陶子と仲良くなることができた。そう思うと、みぞれはこの宇宙の偶然や奇跡というものに感謝したくなる。

「へんな子ね」

陶子は軽く肩をすくめた。

みぞれが六年生のとき、生学校の校庭でチャリティバザーが催された。

有志が要らなくなったものを持ちよって売り、その売り上げ金を海外の恵まれない子供たちに支援するというものだ。

学級委員だったみぞれは、クラスの先頭に立って活動した。

放課後遅くまで残って、仲の良い子たちとあだこうだ言いながら値段をつけていく作業が楽しかった記憶がある。

だが、バザー当日。

みぞれたちが用意した文房具や玩具のたぐいは、まったく売れなかった。たまに家の近所の知り合いや、教師がお情けで買ってくれたが、目標に掲げる売上金額二万円からはほど遠かった。

バザーの後半、ほかの子が売り子を交代してくれたので、みぞれはほかの店を見てまわることにした。

古着をハンガーにかけて並べてある店や、古いゲームソフトやCDを数百円で販売している店は、そこそこ客の出入りがある。

もっと工夫すべきだったな。

売れ残った大量の品物を思い、憂鬱な気分になる。

せっかくみんなでアイデアを出し合ったのだから、目に見える成果を出したかった。数千円程度の義援金では、クラス会で発表するのも気恥ずかしい。

ため息を吐きながらバザー会場を見てまわったとき、ふと校庭の隅っこの店に目が留まった。

埃っぽいごさの上に、黒いビニール鉢がみっちりと並べてある。スペアミントやローズマリーなどのハーブの小苗だ。どれも百円均一で、黒山の人だかりが出来ている。

たくさん持つてきてる。

まるで業者のような持込っぷりだ。売り上げもなかなかのものらしく、クッキー缶に千円札や小銭が投げこんである。

凄いなあ。

どんな人がやってるんだろう。

そう思つて人垣をひよいと覗くと、店の売り子たちと目が合った。ふつくらとした顔立ちの活動的な少女と、針のような長身痩躯の儂げな少女だ。二人とも制服の上から園芸用の帆布エプロンを掛け、三角巾で髪をまとめている。

一人がお客とお金のやり取りをして、もう一人がせっせと苗をレジ袋に詰めてゆく。次から次へと客が途切れることなく来るため、二人とも息つく暇もないくらいだった。

たかだか四時間程度の開催時間中にほとんどの苗を売りさばくと、二人は颯爽と二万円もの大金を本部に寄付した。

「……買っちゃった」

店じまいの仕度をする二人を遠巻きに見ながら、みぞれはレジ袋の中を覗きこむ。

ジャーマンカモミールの小さな苗。

指先で触れるとほんのり林檎の香りがする。あぶら虫がつきやすいから、風通しに注意してね、と長身の少女がアドバイスをくれた。……きれいな人たちだったな。

彼女たちから満面の笑顔で「お買い上げ有り難う御座います！」

と言われたとき、何故だか胸がどきつと疼いた。

あの人、どこの中学なんだろう？

みぞれは自分たちのブースに戻ってくると、バザー主催の先生た

ちから詳しい話を聞いた。

彼女たちは鴨東中学園芸部の生徒で、もともとはうちの学校の卒業生だと分かった。チャリティバザーをやるというので、余っている苗木を持ってきてくれたのだ。

「あの髪の長いひとは？」

「ああ、部長の来海陶子さんよ」

「陶子さん」

みぞれは名前をつぶやき、ぼおとした。

あの人と一緒に中学に通えたら。

一緒に園芸をやれたら……

カモミールのやさしい香りに包まれながら、みぞれはひとしれずそんな想いを抱いた。

放課後。

みぞれはほかの部員が来る前に、泥まみれの鉢を洗うことにした。こういう仕事は、新入部員がするものだ。

「お、重い」

手にした鉢はずっしりと重量感がある。

歴史ある鴨東中学園芸部では、使われている鉢の大半が釉薬のかかった素焼き鉢だ。

重くてかさばる分、プラ鉢に比べると扱いづらいが、空気の通りが良いので根腐れを起こしにくい長所がある。

四つ五つ重ねると結構な重量だ。

みぞれは両手で持つと、えっちらおっちら水道の前まで運んだ。

亀の子たわしでごしごし擦っていると、突然大声で名前を呼ばれた。

「ちよつとみぞれ！」

「はい？」

みぞれが腰を上げると、ポニーテールの少女がしかめ面で駆けつけてくる。

「あんたその鉢、どこから持ってきたの？」

「あの、裏の物置から」

「それ学校の備品だから。園芸部のじゃないから勝手に洗ったら怒られるよ」

「怒られるんですか？」

「用務員の加藤さん、生徒が勝手に触るのすごく嫌がるから。早く戻しておいて」

そう命じるのは、園芸部副部長を務める三年の三賀^{みかちえり}智恵里だ。

どちらかというと控え目な印象の陶子と違い、こちらは澁刺とした正当派（？）の美少女だ。だれとでも分け隔てなく接するさばさはした性格と、中学生にしてはメリハリのある体型もあって、男子から人気がある。

もともと本人は色恋沙汰には関心がないらしく、男子から告白されようと「ごめんなさい。興味ありません」の一言ですべて斬り捨ててきた。

「元の場所に戻しておけば大丈夫ですね」

「ええ。けどそんなに一度に持てる？」

智恵里が不安げに眉をひそめる。

加藤さんにバレル前に片づけようと、無茶をして全部持ち上げようとした。

「このくらいなら」

「ちよつと、あまり無茶を……」

智恵里が釘をさそうとした瞬間、

「あわわッ！」

案の定、ぬれた鉢で手をすべらせる。

慌てて智恵里が手をさし添えたから大惨事には至らなかったものの、一番下の鉢が落下の衝撃で真つ二つに割れてしまった。

「あちゃー」

「ご、ご、ごめんなさい！」

「あーあ。ダメだこりゃ」

智恵里が割れた鉢を合わせるが、ふたたびぱかつと半分に分れる。接着剤で誤魔化しが利くようなものでもない。

「謝るしかないねえ」

「うっ……」

「そんな顔しないの。あたしも一緒に行って頭さげてあげるから」
みぞれと智恵里は、割れた鉢を持って加藤さんのところへ出向いた。

用務員の加藤さんは、五十前後の小柄な男性だ。人好きしない目つきで、みぞれと智恵里を交互に睨みつける。

平然とした顔の智恵里と違い、みぞれは針のむしろに座る気持ちだった。頭ごなしに怒鳴りつけられたらどうしようか、と想像してお腹がぎゅうと痛みだしてくる。

割れてしまったものは仕方ない、と前置きをすると、加藤さんは学校の備品を勝手に持ちだしたことをねちねちと咎めた。

中年の男性から責められるのは怖くてつらいが、一番つらかったのは無関係なはずの智恵里までが叱られたことだ。

後輩にきつちりと学校のルールを教えてなかったのは先輩である智恵里の過失だと、脅かすような大声をだして叱った。

全部自分の責任なのに、智恵里までとばっちりで叱られたのが申し訳なく、思わず嗚咽がこみ上げてくる。

泣いてはだめと思えば思うほど、悔しくて涙があとからあとからこぼれる。鼻の奥がつんとして、じわあと視界が滲みだした。

それを見て加藤さんも気後れしたのか、今後は気をつけるよ、とつつけんどんに言って二人を解放した。

「なんで泣いてるの？」

「だ、だって」

智恵里が叱られたのが申し訳なくて、とも言えず、みぞれは鼻をすすする。

「加藤さんそんな怖かった？ あたしなんか、もう叱られ慣れちゃってるからなんとも思わないけど……まあ、最初はだれでもびびる

よね。結構コワモテだしさ」

みぞれが泣いた理由を勘違いしたのか、智恵里がみぞれの頭を撫でる。

「ほら泣かないの。中学生なんだから」

「う、うん」

思わず半べそでうなづく。

智恵里がさし出してくれたハンカチで、熱くぬれた目尻を拭った。智恵里のハンカチからは、レモンバーベナの爽やかな香りがする。脇芽を摘んでポケットに入れておいたのが潰れたのだ。

「そろそろ陶子が来る頃ね」

智恵里が腕時計をかざすと、見計らったかのようなタイミングの良さで、校舎わきの非常階段をくだってくる甲高い靴音がした。

「ごめんなさい」

「こら、遅刻だぞ」

「図書委員の仕事が長引いてしまって」

わるびれるでもなく弁解すると、陶子は物置の陰に隠れて制服のスカートの下にジャージを穿く。

一日作業のときは上下ともジャージに着替えるが、放課後の簡単な作業のときは、着替えるのが面倒なのでジャージのズボンだけ穿いて済ませる。

せつかくの美少女も、ジャージスカート姿になると不格好だった。けれど当人は見てくれのわるさなど気にすることなく、物置から三本のスコップを持ってくる。

「さっさと残りの野菜を植えちゃうわよ。今年こそ成功させるんだから」

「今年こそ？」とみぞれ。

「じつは去年は失敗しちゃってね」

智恵里がため息混じりに補足する。

去年は夏場の水やり当番の行き違いや、害虫や病気の大発生などで、春先に植えた野菜の大半を枯らしてしまった。

今年はみぞれが加わって三人になったので、例年のハーブに加えて、野菜にリベンジを挑むことに決めたのだった。

「うまくつくれたら野菜鍋したいね」

「智恵里ったら食い意地張ってるんだから」

「苦労してつくったら食べたいと思うのは当然でしょ。陶子は食べたくないの？」

「もちろん食べるに決まってるじゃない」

「だよー」

陶子と智恵里はにやつと笑い合つと、腕と腕を突きだしてハイタッチをした。

仲良いんだなあ。

智恵里の前ではこぼれんばかりの笑顔を見せる陶子を遠巻きに眺める。みぞれ一人がどことなく蚊帳の外だった。

校舎裏の一角を耕し、ピーマンやトマトの苗を植え終える頃には、午後五時をまわっていた。

「あら、もうこんな時間なのね」

首から垂らした埃まみれのタオルでひたいを拭つと、陶子はほつと放心した口調で言った。

一心不乱に作業をしていて、日が暮れたことにさえ気づいてなかった。

「どうにか暗くなる前に終わったね」

「これも千秋さんが手伝ってくれたおかげね」

「そんな。私なんて役立たずで……」

「うつん、すつごく役立ってるわよ。ねえ智恵里」

「まあね。もう少しドジなところを直した方がいいけど。あと引つ込み思案で意気地無しで泣き虫なことか」

「ぐ……」とみぞれは情けない顔をする。

「気にしないで。智恵里の口のわるさは昔からなんだから」
落ち込むみぞれを陶子がやさしく慰める。

「それじゃあ、お茶でも飲んで帰りましょうか。千秋さん、時間は大丈夫？」

「行きます！」

「智恵里は……まあOKよね」

「なんでよ」

「だって智恵里、毎日暇じゃないの」

「それはそうだけど……」

ぶつくさ言う智恵里をよそに、陶子はさっさと撤収の準備をしました。

「あ、私ちよつと教室に忘れ物」

「五分で戻って来ないと先行っちゃうぞ」

「ま、待っててください！」

智恵里に囃し立てられ、みぞれはあたふたと小走りする。小学校時代、五十メートル走でどんけつだったみぞれの足は遅く、走るとすぐ息があがる。

「そんなに慌てなくても、ちゃんと待ってるから。転ばないようにね！」

陶子が淑やかな声で注意した。

気をつけます、と返事をしようとしたところで、昇降口の前に積もっている落ち葉に足をすくわれてすっ転んだ。

「ギャグ漫画かい！」

と智恵里に大声で突っ込まれ、かあつと赤面しながら校舎に逃げこんだ。

上履きを脱ぎ、階段の前まで来たとき膝小僧がずきつと痛んだ。

おそるおそるスカートをめくってみると、砂まみれの膝小僧に血が滲んでいる。転んだ拍子に擦りむいてしまった。

「痛ったあ……血が出ちゃってる」

みぞれは半泣きでそうつぶやき、階段をあがる。

たいした傷ではなかったが、階段をあがると膝の皮が突っ張って

ずきずき痛んだ。

足が重く、目の前がふらふらする。

さすがに二度も転ぶのは御免なので、みぞれは手すりを掴みながら慎重にあがった。

どうして私、こんなドジなんだろう。

急に悔しさがこみ上げてきて、どうにも我慢できなくなる。

昔から極度の運動音痴だった。平らな場所で転ぶのはしょっちゅうだし、体育の成績は毎回ビリッけつで、男子からバカにされた。

三半規管に異常があるのではないかと心配した両親によって、医者に連れて行かれたこともある。精密検査の結果、異常は認められなかったが、それでもみぞれの運動音痴は変わらなかった。

それも個性なんだから、と両親が慰めてくれたが、何の慰めにもならない。

個性だろうと何だろうと、人前でずっとこけて恥ずかしい思いをするのは変わらない。それを個性と認め、肯定的に受けとめてくれる人などごくわずかだ。

自分が人より劣っているのを認めたくなくて、人とおなじように振る舞おうとして、結局毎回へまをする。

だめ人間ならだめ人間らしく、自分はもうだめなんだと学習すればいいのに、それでも次は人並みに上手くやれるのではないかと期待をこめて、また失敗を重ねる。

十二年間、ずっとそうだった。

もうやだよ、こんなの。

橙色の夕日がさし込む放課後の廊下をとぼとぼ歩きながら、みぞれはうつむく。

掃除用具入れやロッカーから、ほの暗い影が伸びて窓枠の影と重なる。

格子状の黒いシルエットの隙間を縫うようにして、みぞれは自分の教室に入る。

どれだけ先輩たちに憧れたって私なんか。

私なんか。

……

あれ？

なんだろ、この違和感。

「廊下、ねじ曲がってる？」

みぞれが口に出した瞬間、足もとの影がふいにざわっと波打った。

「えっ？」

息を飲むみぞれの周囲に影から生じた鉄格子が張り巡らされる。

数十本の鉄パイプがうねりながら互いに身を絡め、みぞれの周囲に複雑で不規則な牢獄を築きあげる。

「え、な、何なの？」

慌てふためいて鉄格子に掴みかかるが、びくとしなかった。

「ぬるぬるしてる……」

手のひらが赤錆まみれだった。鼻を近づけると、腐ったレバーのようなすえた悪臭がした。

おぎゃあ。

とどこからともなく赤子の泣き声が聞こえる。

見ると足もとに、崩れたオムレツのような形状の胎児たちが蠢いている。

温かく安らかな胎内から掻き出された胎児たちが、寒さとひもじさに泣きわめきながら、鉄製のへその緒を伸ばしてゆく。鉄格子の正体は複数の胎児のへその緒が絡んだものだったのだ。

母親のへそを探してうねり狂う金属製のへその緒は、だが天井付近にあらわれた巨大な手術用ハサミによって容赦なく切断されてゆく。

おぎゃあ、おぎゃあ。

文字どおり身を切られる痛みに、胎児たちは啜り泣く。

悪露まみれの紅く爛れた哀れな肉塊となつてなお母を求めすがり
哭く。

切られた鉄格子の断面から、とめどなく臍帯血が流れだし、みぞ

れの頬へばたばたとポスターカラーのような鮮烈な朱が滴る。

「あ……ああ……」

目の前で繰り広げられる戦慄の光景に、みぞれは安心して立ち尽くした。

ハサミを手にした堕胎の魔女が、みぞれの喉を狙ってその鋭い切っ先を突きだしてくる。

よけることなどはなっから頭になく、みぞれは魅入られるようにして自らハサミの隙間へと首をくぐらせようとした。

「バカ！ 何やってんの！」

どこからか智恵里の声がしてはつとわれにかえる。

と、空中に浮かぶ巨大なハサミめがけて、鎖付きの分銅が飛んできた。分銅はハサミの刃先をそらし、みぞれは間一髪のところで首をちょん斬られずに済んだ。

「智恵里先輩！」

突然智恵里が飛び込んできたかと思うと、みぞれを抱きかかえてふたたびジャンプした。

脅威的な腕力と飛躍。

だが、それにも増してみぞれを驚かせたのは、智恵里の服装だ。さっきまでのジャージスカート姿ではなく、黒いフリル付きの衣裳を身に纏い、腕には真つ黒な宝石が象嵌されたブレスレットをはめている。肩に刺した黒バラのコサージュから甘いローズの香りがした。

「せ、先輩その恰好？」

「説明はあとで！」

そう言うつと、ふたたび跳躍した。

一回のジャンプで十数メートル近く移動している。高さこそ出ないもの、滞空時間がやたらと長い。みぞれを小脇に抱えた状態でその距離なのだから、身軽な状態ならさらに遠くまで移動できるものと思われた。

「ちっ、結界が案外狭いな」

智恵里がほぞを咬んだ。

得意の低空ジャンプの連続で魔女との距離を稼ぐ作戦が裏目に出た。魔女が造りだした異空間は智恵里の予想より狭く、見えない壁に行く手を阻まれ、立ちまわりが難しい。

「仕方ない、ここで応戦する」

「応戦？」

みぞれは目を丸くする。

智恵里は腰に吊した鎖鎌を手取る。

鎌を右手に構え、左手の分銅を回転させてみぞれに対する側面からの攻撃を弾く。

高速回転する分銅がへその緒を次つぎと粉碎し、辺りに腥い血が噴き散る。

「智恵里先輩！」

「動かないで。当たったら怪我するよ！」

そう叫びながら、智恵里は手にした鎌で背後から忍び寄るハサミを受けとめる。

刃先と刃先がこすれて火花が飛び散った。

激しい鏝迫り合い。

智恵里は顔をしかめながら踏ん張る。

魔女の臂力と智恵里の臂力はほぼ互角らしく、両者一步も退くことなく、ぎぎぎと刃物が擦れる嫌な音のみが異空間に響き渡る。

「くっ」

だが、しだいに智恵里が押されだした。

みぞれを庇うために分銅の回転を止めるわけにも行かず、いったん退いて態勢を立て直すことも難しい。

二方向からの猛攻を受け、智恵里が一步步退く。やがて見えない壁の一角へと追い詰められた。

魔女のハサミが智恵里の頬をさっと削ぎ、智恵里の頬をつつと血が垂れ落ちる。

「先輩逃げてッ！」

みぞれが血相を変えて叫ぶと、智恵里は振り向いてにいと破顔一笑した。

「こつみえてもあたし、臆病もんでさ。可愛い後輩を見捨てて逃げる勇氣なんて、これっぽっちも持ち合わせてないのよ」

「先輩……」

「ねえ、そうでしょ陶子！」

その刹那、智恵里は回転する分銅を敵の手術用ハサミへと巻きつける。

高速回転する分銅は凄まじい勢いでハサミへと絡みつく。が、勢い余って鎌の部分まで持つて行かれ、智恵里はまったくの無防備になってしまった。

ハサミこそ封じることができたが、無限に湧くへその緒から身を護る術をなくし、智恵里はたちまち無数の触手めいた鉄格子によって手足を雁字搦めにされた。

「う……がああッ！」

喉を締めつけられ、智恵里の顔が苦痛に歪んだ。目をかっと見開き、みるみる顔が赤黒く染まってゆく。

「や、やめてッ！」

先に厄介な智恵里を始末すべきと判断したのか、魔女は群がるへその緒に命じて智恵里を絞め殺そうとした。

だが、智恵里への締めつけがさらに強まるうとした瞬間、突然空間に亀裂が生じた。外部からの強いディストーションによって異空間を構成するテクスチャがひずみ、ガラスのように碎け散る。

割れ目から飛びだしてきたのは、智恵里とは対照的な純白のイブニングドレス姿の陶子だ。首に宝石が詰め込まれたチョーカーをしていて、淑女風の身なりなのに、どこことなく精悍な印象だった。

「陶子先輩！」

「はっ！」

彼女はドレスの裾から匕首を一束掴み出すと、目にも留まらぬ速さで魔女めがけて投擲した。

指の股に複数のヒ首を挟み、一回の投擲で二、三本のヒ首を射出する技だ。

「グォ……」

魔女がよろめく。

ハサミさえ自由だったら、魔女とてヒ首を弾くことはできたはずである。

だが、智恵里の分銅によって絡め取られた不自由なハサミでは、連続して投げつけられるヒ首の猛攻を防ぐのは不可能だ。

全身の数力所を刃物で貫かれ、魔女は苦しげに身をよじる。

「……嫌なところ見られてしまうわね」

陶子はみぞれの方へ寂しげな顔で微笑みかけると、鋭い目つきに戻って魔女の懐へと飛びこんだ。そして手にしたヒ首で魔女の急所を滅多刺しにした。

魔女の断末魔の哄笑がケタケタと異空間に響き渡る。

「間に合って良かったわ。智恵里」

「来るの遅すぎだったの」

智恵里は絞めつけられた喉をさすりながら、弱々しくしかめっ面した。

陶子がさし出した手を掴み、ゆっくりと立ち上がる。多少、よろけているがしっかりした足取りだった。

「貴女が勇み足で先に飛び込むからよ。外側から結界をこじ開けるの大変なんだから」

「へへ。ただでさえ少ない園芸部の部員が、二人減るとこだったね」「笑えない冗談ね」

陶子がやれやれと嘆息し、魔女の亡骸から黒い物体を拾い上げる。つややかな光沢を放つ漆黒の宝珠だ。

と、魔女の力が失われたことで禍々しい異空間が薄らいでゆき、見慣れた放課後の校舎の風景が立ちあらわれてくる。

気がつく、みぞれは自分の教室でカバンを抱えたまま立ち尽くしていた。

2話

それから三十分後。

みぞれは陶子たちと一緒に、学校の近くの喫茶店『ヒュアキントス』へと足を運んだ。

店内中央の巨大なスピーカーから室内楽が絶え間なく流れるなか、園芸部の三人は窓際の席に腰をおろし、それぞれ飲み物を注文した。「どこから説明したものかしらね」

陶子が腕組みをして、困ったようなしかめっ面をした。

「まあ、基本的なところは話さないかね」

「全部話してしまうの？」

「仕方ないじゃん。まさかみぞれが襲われるなんて想定外だしさ」

「でも、それだと計画が……」

陶子と智恵里が小声でこそそこそと囁き交わす。どうやら、みぞれにどこまで事情を話したものがどうか、決めあぐねているらしい。

「あ、あの……」

みぞれはおずおずと口を開く。

「お二人のあれは、何なんですか？」

みぞれの問いに、陶子も今さら隠し立ては不可能だと悟ったらしく、観念して目を閉じる。

「わたしたちはね、魔法少女なの」

「魔法少女……？」

みぞれは口の中で復唱した。

陶子と智恵里は、代わる代わる話をしてくれた。

自分の願いを叶えるため、二人は魔法少女となる契約を交わした。魔法少女となった者は、どんな願いでもひとつだけ叶えてもらえる代わりに、人々を襲う魔女と戦い続けなくてはならないのだという。「願いを叶えてもらえるんですか？」

「……ええ」

陶子の瞳が一瞬昏く染まる。

智恵里がキャラメルラテを飲みながら後を継ぎ足した。

「魔女つてのは、さっきのへんてこなやつらね。ああやって、絶望した人の心につけこんで悪さをする連中なんだ」

「魔女……」

みぞれはさっきの胎児とハサミの化け物を思い出し、身震いした。危うくあれに捕まって、殺されるところだった。

陶子と智恵里が異変に気づかなかつたら、こうして温かいアールグレイティーを飲むことすら出来なくなったのだ。

そう思うととても怖ろしかった。捕まっている最中は興奮していて、さほど恐怖は感じなかったが、今さら手足が震えてくる。

「哀れな子たちよ」

陶子がぼそっとつぶやいた。

魔女を殺してから、陶子はどことなく気が塞いだ様子だ。

注文したカプチーノにほとんど手をつけることなく、ヒヤシンスの花を象った淡紫色のティースプーンで、カップの中をぐるぐる攪拌している。

「陶子、飲まないと冷めちゃうよ」

「え？ ああ、そうね」

どことなく放心した様子で、ようやく泡の消えかかったカプチーノを二くち三くち啜りだした。

どことなく白けたムードが漂いだし、智恵里が口を閉じて自分の飲み物に集中した。

疑問は山積みだったが、なんとなく質問しづらい雰囲気だ。みぞれは胸の中に疑問を押しこみ、何気ないふりをした。

下手に詮索をして、二人から嫌われてしまうのが怖かった。やつとの思いで手に入れた自分の居場所を、こんなことで手放したくはなかった。

「魔女に襲われるのは、心にどこか隙がある者が多いの。千秋さんは、身に覚えがあるかしら？」

「ない……と思います」

さらっと嘘を吐き、胸がちくつとした。

まさか、自分がつねに劣等感に苛まれて生きているなどと言えなかった。

陶子や智恵里のまぶしさに惹かれ、その光にあやかろうとして、わざわざ中学受験をしたとは言えなかった。

「なんで襲われたか、分かんないです」

「本当に？」

陶子が静かな口調で尋ねる。

責めるでもなく、疑うでもなく、静謐な瞳でじつとみぞれの瞳を凝視する。

陶子の昏く明澄な瞳で見つめられると、目と目を通して心の奥底に隠してある汚い泥や澱を見透かされるような気がした。

「本当です」

「……そう。ならいいのだけど」

陶子は目をそらした。

智恵里をそれとなく促し、テーブル脇に吊してある勘定書を手に取る。みぞれの分を含めて二人で割り勘するらしく、レジの前でめいめいに財布を開く。

よかった。もう帰るんだ。

みぞれはほつと安堵し、そんな自分に対して胸がむかつくような自己嫌悪を抱いた。

自分を命がけで救ってくれた二人に対して、ひどく失礼な態度だと思った。

帰宅して早々、みぞれは浴槽を掃除して湯を張ると、さっさと先に入浴した。

普段なら父の帰りを待つのだが、早く体に付着した血の臭いを洗い清めたかった。全部洗い流して、今日の体験を一刻も早く忘れたかった。

たぶん、先輩たちもそれを望んでる。

陶子と智恵里の様子からして、みぞれがあの世界に関わるのを嫌がってる気がした。おそらく、本来は中学生が関わるべきではないもののだ。

「……まだ血の臭いがする」

みぞれはボディークリームを泡立てて、懸命に全身をスポンジで擦る。何度洗おうと、まだあの世界の悪臭が付着している気がして、皮膚が赤くなるまでごしごし擦った。

陶子たちが、あの悪臭をまるで気にしてなかったのを思いだす。たび重なる魔女との戦いで、血のにおいに慣れてしまったのか。

魔法少女として日夜戦う彼女たちにとって、あの程度の血や汚れなど日常茶飯事なのだろう。だからこそ、着替えもしないで平気で戦いのあとに喫茶店へと行けるのだ。

陶子たちの逞しさに憧れる反面、その無神経すれすれの平然とした態度に、どこかおそろしさを感じた。

小学生の頃、道徳の時間に見た写真が脳裏に蘇る。アフリカのどこかの紛争地帯で、小学校低学年くらいの子供たちがアサルトライフルで武装している写真だ。

浅黒い肌の少年が、玩具を弄ぶようにして人殺しの道具を構えている。その写真を見たときに抱いた違和感に似ている。

陶子も智恵里も、普通の女の子なのにあんな化け物と戦ってる。

戦いが日常の一部となって、血しぶきを浴びたあとに平然とお茶ができる。

それが無性に怖ろしく、同時に、強く心を惹かれる。

魔法少女として戦うときの陶子の姿には、バザーでみせた純白の輝きとは別の、どこか後ろめたい漆黒の輝きがある。

魔法少女、かあ。

湯気がもうもうと立ちのぼる湯船の中、手足を伸ばして肩までお湯に沈んだ。炭酸入浴剤の欠片が水面に浮かび、気泡を吐きだしてみるみる小さくなる。

こんな私でも、魔法少女になれるのかな？

ふとした思いつきに、みぞれはふっと頬を緩める。そんなバ力な「なあんてね」

浴槽のへりにもたれかかって水滴まみれの浴室の天井を眺めていると、ふとどこからか声がした。

「なれるよ、キミならね」

はっとして身を起こし、周囲を眺める。

半開きの浴室の窓から、隣近所の声が聞こえたのだろうか。

そう思って耳を澄ませるが、聞こえるのはどこかの家から流れてくるピアノのみだ。誰かが課題曲をさらっているらしく、シューマンのトロイメライの途切れがちの演奏が、うつすらと茜空に響き渡る。

「キミが千秋みぞれだね」

「ひっ！」

振り向いたとたん思わず声が出た。

浴室の中、みぞれが普段使っているプラスチック製の椅子に見慣れない生き物がちょこんと鎮座している。

猫ほどの大きさで、ウサギのような真っ赤な目をした愛くるしい生き物だった。

「頭の中から声が？」

目の前の生物が発しているのだろうか。

みぞれは困惑して、頭に巻いてあるタオルで胸もとを隠した。

目の前にへんてこな生き物があらわれたのに、どこか平然としている自分がいる。

魔女との遭遇や、魔法少女の活躍を見た直後なので、ふしぎなものに関する感度が鈍くなってしまうているのだろうか

「今、ボクはキミの頭の中に直接話しかけているんだ。人間が言うところのテレパシーというやつだね」

「貴方は？」

「ボクの名前はキュウベえ。キミたちを魔法少女に導く役目を担っ

ている者さ」

自己紹介をして、太くふさふさした尻尾をゆらした。

「千秋みぞれ。キミには叶えたい願いはあるかい？　ボクなら、キミのその願いを叶えてあげられるよ」

「願い」

みぞれは困惑して胸に手をやる。

「そう。ボクの見込み違いでなければ、キミは優れた魔法少女となる素質がある。是非ともボクと契約をして、魔法少女になって欲しいんだ」

「私が、魔法少女に……？」

みぞれが放心していると、浴室の外から「みぞれ、いつまで入ってるの」と母親に声をかけられた。

「お、お母さん！」

キュウベえが見つかってしまう。

だが、浴室を覗き込んだ母親は、浴槽内で棒立ちするみぞれを訝しげに一瞥した。

「早く出てきてご飯の手伝いをして頂戴」と言うと、キュウベえには目もくれず浴室の戸を閉じた。

「心配要らないよ。魔法少女となる素質がない人間には、ボクの姿は見えないからね」

「さ、先に言つてよお」

ほっと安堵してみぞれはお湯につかる。

「訊かれなかったからね。訊かれもしないのに説明する必要はないだろ？」

キュウベえは取り澄ました顔をする。

「それで、魔法少女の件なんだが」

「悪いけど、あとでにしてくれる？　私、早くお風呂出てお母さんの手伝いしないと怒られちゃう」

「そうかい。それなら、また時間があるときに来るよ。邪魔したね」
キュウベえはくるんと身を翻すと、浴室の窓の隙間から音もなく

外へと消えた。

その日は、夕食に何を食べたのか記憶になかった。お風呂から出て、すぐ配膳の手伝いをしたのにである。

ただもぐもぐ口を動かして、今日はご飯お代わりしないのね、と冷やかす母親にうん、うんと適当な相づちをしたのは覚えてる。

食事を終えると、すぐ布団に潜り込んだ。電灯を消し、羽毛布団にくるまって、胎児のような態勢で温かい闇を見つめる。

「答えは出たかい？」

「毎回、突然出てくるのね」

みぞれが布団をはぐと、羽毛布団の上にキュウベえの姿がある。上に乗っているはずなのに、ほとんど重さを感じなかった。

「答えは、ノーよ」

みぞれは嘆息しながら言った。

キュウベえは表情を変えることなく、首を傾げる。声にこそ出さないものの、テレパシーを通じて伝わる言葉の調子が少し変わる。

「へえ、意外だな。キミは魔法少女になると思ったんだけどね」

「残念だけど、その気になれないから」

「理由を訊いてもいいかな？」

「言いたくない」

「……そっか」

キュウベえはすつくと立ち上がると、みぞれの布団から飛び降りた。

「気持ちが変わったら、いつでもボクを呼んでよ。さっきも言ったけど、キミは魔法少女としてかなりの素質がある。このまま見過ごすのは惜しいんだ」

「才能なんて、どうして判るの？」

「判るよ。才能ある少女を見だし、魔法少女にするのがボクの務めだからね」

それじゃあまた今度、と言い残すと、キュウベえは部屋の隅っこ

の間に消えた。今度は窓からではなく、何もない空間で立ち消えた。なんだか妖怪みたい。

とみぞれはふっと思い、あながち的外れでもないかな、と思いな
おし、羽毛布団の中にふたたびくるまる。

闇の中にうつすらと浮かびあがる天井付近の模様を仰ぎながら、
みぞれは陶子たちのことを考えた。

陶子先輩や智恵里先輩は、どんな願いを叶えて魔法少女になった
んだろう。魔法少女になって後悔してるんだろうか。それとも、願
いを叶えて満足しているんだろうか。

明日会ったら訊いてみたい。けれど、それを訊くのは怖ろしい。
そうすることで、自分と先輩たちの関係が決定的に変わってしまう
気がして躊躇する。

すべてを今日一日の悪夢として片づけ、また何気なく園芸部の活
動に戻れたら。ミスしへまをしながらでも、先輩たちと仲良く笑っ
て野菜をつくれるなら。

魔女と遭遇する前の自分に戻れたなら、どんなに良かっただろう。
先輩たちに対して気兼ねすることなく、だめ人間と自分を責めなが
らでも、日常のこちら側に踏みとどまっていられる。別の世界を知
らないでいられる。

もし、私の記憶を消せるなら……

みぞれは自分の心に浮かんだ願いに気づき、苦笑いした。

魔法少女に関する記憶を消すために魔法少女になるのは本末転倒
だ。

まあ、いいや。

なんだか疲れちゃった。

今日は寝よ。

考えるのに倦み飽きると、みぞれは頭から布団をかぶった。

こうしていると、十分としないで眠くなる。子供の頃から、みぞ
れは真っ暗闇でないと眠れないたちだった。

野菜を支えるのに使う支柱の数が足りなくなつたので、昔園芸部で使っていた篠竹を倉庫の奥から引っぱりだしてきた。

部員わずか三名の園芸部では、学校から出される活動費も微々たるものなので、使えるものはどんどん使っていきたい。

「煤けて真っ黒ですね」

「まあ、近ごろはホームセンでもっといいプラ製の支柱が売ってるからね。かれこれ十年以上使われてないんじゃないの」

束ねてある篠竹を、智恵里が倉庫の外へと運び出した。そのままでは汚いので、外水道で軽く洗って乾かす。

「それじゃあ誘引やるよ」

「はい」

みぞれと智恵里は麻紐で野菜の苗を支柱に巻きつけてゆく。地道だが、今後の生育に影響を与える大事な作業だ。

今日は智恵里が風邪で学校を欠席しているので、二人だけでの作業となる。校舎裏の畑に腰をかがめて、黙々と支柱の結束をした。

「……」

ちらちらと智恵里の方を見る。

気まずい。

智恵里とは、別に仲がわるいわけではなく、むしろ人見知りするたちのみぞれからすると仲の良い部類に入る。

だが、昨日のこともあって、どこかぎこちない。会話が弾まなくて息苦しくなる。

「あの」

「うん？」と智恵里が顔をあげる。

「陶子先輩、体の具合大丈夫なんですか？」

「単なる風邪だと思うよ」

「そうですか」

とみぞれはうなづく。

そしてまた脇目もふらず野良仕事に精を出した。野菜が終わると、次はハーブの手入れをする。害虫を殺し、枯れた葉を取り除く。

「……あのさ、みぞれ」

今度は智恵里の方が先に口を開く。

「昨日あのあと、何かあった？」

「何か？」

「たとえば、誰かが訪ねてくるとか」

智恵里はわざと曖昧にぼかした。

が、その来訪者がキユウベえを指しているのは明らかだった。

みぞれの心臓が早鐘を打つ。

もし正直に「来た」と答えたら、どうなるんだろうか。魔法少女になる気があるのか、と問い詰められるんだろうか。

みぞれが答えに窮したのを見ると、おおその事情を察したのか、智恵里が嘆息して軍手を脱ぐ。

「キユウベえが来たんだね？」

「……はい」

「魔法少女になれと勧められた？」

みぞれはこつくりとうなずく。

智恵里の瞳に一瞬奇妙な光が宿るが、すぐにそれを打ち消している。いつもの気さくな笑顔に戻ると、

「やめときな。魔法少女なんてのは、すごく大変だからさ。あたしも陶子も毎日そりやあもう忙しくって」

「分かってます。ちゃんと断りました」

「断つてもまたすぐ来るよ。しつこいやつだからね。ほんと、新聞の勧誘員並み」

「そんな感じですね」

「ま、魔法少女になるかならないかは、すぐに決めなくていいんじゃないの？ これって一生の問題だしさ」

智恵里がさりげなくかまをかけてくる。

みぞれの真意を推し量ろうとしてきているのだ。みぞれが魔法少女になることに対して、智恵里がどの程度肯定的なのか否定的なのか、その立ち位置が掴めない。

なので、曖昧に笑って誤魔化した。

作業が終わると、智恵里がラーメンを食べに行こうと誘ってくれた。駅の近くに、美味しいとんこつラーメンの店があるという。

「陶子は脂っこいのはダメだから、あんまり行く機会ないのよね。みぞれは？」

「とんこつ大好きです」

「そっか。なら良かった」

智恵里が水道で手の泥を落とし、ハンカチで手を拭く。爪の隙間に泥が入ってないか、手のひらをかざして丹念に調べる。

結構几帳面だなあ。

繊細な性格の陶子が意外と身なりに関して無頓着なのに、大ざっぱな智恵里が爪の隙間の小さな汚れまで目ざとく見つけるのは、なんだかちぐはぐで面白い。

「それじゃあ……」

行こうか、と智恵里が言おうとした瞬間、表情が硬直した。

学校の境界を示す金網フェンスの上に、夕日を浴びて燦然と輝くキュウベえの姿がある。悠揚迫らざるまなざしでみぞれたちを見おろしてきた。

「やあ智恵里。久しぶりだね」

「……何の用？」

智恵里の声が険悪になる。

「何の用とはご挨拶じゃないか。せつかくキミのために有益な情報を持ってきたのに」

「あたしの前から消えて」

智恵里は目を合わすことなく、ハンカチをポケットに突っ込む。殺気立っているのか、手にしたハンカチがくしゃくしゃだ。

「それから、この子に関わらないで」

「それは出来ない相談だね。けど、今日は別の急用があるんだ」

よっと可愛らしい声でフェンスから飛び降りると、キュウベえは

二人の方へ音もなく歩み寄ってくる。

と、智恵里の表情がさあっと一変した。

「どうやら、みぞれには聞こえないよう、智恵里にのみテレパシーを飛ばしたらしかった。」

智恵里は目を閉じ、何かを感知するとかつと目を見開いた。

「ようやく気づいたかい？ 相方の危機に気づかないなんて、キミらしくない失態だね」

キュウベえが、今度はみぞれにも聞こえる声で胸の中へと語りかけてくる。

「智恵里先輩？」

「ごめんみぞれ！ 先帰ってて！」

「えっえっ」

智恵里はそう言うと、突然全速力で走りだした。俊敏な智恵里は、たちまちみぞれの視界から姿を消した。

「ま、待ってください！」

「無理だよ。今のキミでは魔法少女の脚には追いつけない。キミがボクと契約をして、魔法少女になるのなら話は別だけどね」

「貴方、先輩に何を吹きこんだの？」

みぞれの問いに、キュウベえは恬淡とした様子で答える。

「『陶子が別の魔法少女に襲われている』そう教えたのさ」

「別の魔法少女？」

「そう。よその土地から流れてきた子だね」

「どうして？ 魔法少女の敵は魔女なんでしょ？ 魔法少女同士で戦う理由なんて、どこにあるの？」

「コトはキミが考えているより複雑なのさ」

「陶子先輩のところに案内して」

みぞれはキュウベえを掴み上げると、強い口調で迫る。

「構わないけど、キミの足では……」

「自転車取ってくるから」

みぞれは大急ぎで駐輪場へ向かった。

たとえ魔法少女の駿足でも、自転車なら追いつける可能性がある。何が起きているのかは分からない。けれど、智恵里のあの狼狽ぶりからして、陶子が良からぬ事件に巻きこまれているのは間違いないかった。

行かなきゃ。」

何度も転びそうになると、みぞれはやつとの思いで愛用の自転車を漕ぎだした。いつの間に飛び乗ったのか、キュウベえが荷台にちよこんと手足を揃えて座っている。

「本当に行くのかい？」

「早く案内して！」

「人間の行動はときとして支離滅裂だ。千秋みぞれ、キミは魔法少女の世界にこれ以上関わる気がなかったんじゃないのかい」

「いいから早く！」

みぞれが怒鳴ると、キュウベえは尻尾で進むべき方角を指し示した。

陶子先輩、智恵里先輩。

どうか無事でいてください。

みぞれは内心そう願うと、はあはあとすぐ息があがる自分の肺を叱咤しながら、猛スピードで坂道をおっ飛ばした。

キュウベえが案内したのは、市内を流れる宿輪川の河川敷だった。夕闇に閉ざされた河川敷は人気がなく、対岸のコンビニートから突きだした煙突のシルエツトが薄茜色の空によく映えた。

河川敷の土手に自転車をとめると、みぞれは薄暗い河川敷を眺めまわした。

「どこ？ どこにいるの？」

「あそこだ」

河川敷周辺は、古くは茅場だったらしく、今でも水辺に沿ってスキが群生している。

顔の高さほどあるススキのなかに、誰かが佇んでいる。薄暗くて顔は判らないが、わずかな陽光を反射する白い衣裳から、来海陶子その人だと思われた。

無数の尾花が揺れ動く中、陶子の周囲だけ時が制止しているかのような静かさだ。

遠くの幹線道路からダンプカーのクラクションが聞こえ、強く吹きつける風がごうごうとみぞれの耳朵を打ち鳴らした。

ひととき強い風が吹いた瞬間、それが動きだした。

ススキの茂みの中から小柄な影が飛びだし、目にも留まらぬ速さで陶子へ接近した。

「!？」

陶子の表情がひきつる。

とつさに懷から匕首を抜き、それと見当をつけた方角めがけて投擲した。

鋭利な刃先がススキの穂を次つぎと切り落とし、宵闇へと消えてゆく。

だが、影は迎撃を予測し、空高く跳躍した。

飛距離では智恵里の方が上だが、智恵里では到底届かないほどの高度から、隕石のごとき加速で一氣に距離を詰めてくる。

本来なら、空高く飛び上がった相手は、陶子の匕首の恰好の餌食だ。陶子の精密な投擲技術なら、人間程度の大きさの標的であればほぼ確実に急所を狙える。

が、相手はそれすら予測して、陶子のほぼ真上から落下してきた。「あつ」

と陶子が声を洩らした。

完全に裏を突かれ、迎撃の態勢のまま固まる。不測の事態に、攻撃予定だった手足の動作がついてゆかず、動きに乱れが生じた。

どれほど高速かつ精密な遠距離攻撃が行えようと、真上に向かつて攻撃するのはそれ相応の予備動作が要る。肩の可動範囲では対応しきれないため、全身を動かす必要が出てくるからだ。

敵はひと目で陶子の最大の弱点を見抜き、死角を狙って急襲した。水泳の飛込競技のような一糸乱れぬ姿勢で、狼狽える陶子めがけて突進してくる。

百戦錬磨の手練れ。

みぞれの目には、夕闇を背景に飛びあがった黒い影が、陶子に向かって突き刺さるようにしか見えなかった。

「先輩！」

敵の少女が突きだした槍の穂先が、陶子の首めがけて突き刺さる。が、

「ちいっ！」

敵の魔法少女が身を翻し、陶子から距離を置く。

誰かが灯したのか、河川敷に設置してある少年野球用のナイター照明がぱちぱちと点灯し、敵の姿が明らかとなる。

「へえ、あんたの相棒、結構やるね」

立ち止まったため、ようやくみぞれの目にも敵の魔法少女が見えた。

仔猫のような小柄な体つきの、赤毛の少女だった。無骨な槍を構え、口には食べかけの棒付きキャンディーを加えている。

「ふん。二対一か」

赤毛の少女は手にした槍に目をやる。

槍身に鎖付きの分銅がぐるぐる絡まって、彼女から得物を奪おうと引っぱっている。

「智恵里……」

と陶子が小さくつぶやく。

「正義の味方は遅れて参上ってね」

そう言っススキの中から智恵里があらわれた。すぐ姿を見せるのは不利だと判断し、相手が油断する最大の隙を衝いたのだ。

「不意打ちを不意打ちたあ、結構やるじゃねーか」

「あんた、どこの子よ」

「さあな」

口調こそ平然としているが、お互いの手はふるふると小刻みに震えている。相当強い力で引っぱり合っているのだ。

敵の魔法少女はこの前の魔女より腕っ節が強いらしく、不意打ちした智恵里の方が鎖鎌を持って行かれそうな気配だった。

「なら、これはどうだい？」

赤毛の少女が八重歯を見せてにいと笑う。

と、槍がヌンチャクのようにバラバラに変形した。鎖の拘束がほどけると、少女はそのまま槍の柄の部分で智恵里のあごを強打した。

「がはっ！」

無防備なあごを打たれ、智恵里の瞳が一瞬ぶれる。脳震盪を起こしたのだ。

「もらったあッ！」

「智恵里！」

陶子がさかさずヒ首を乱れ撃ちした。

赤毛の少女と智恵里とのあいだに弾幕を張って、接近を疎外する。

「くっ！」

赤毛の少女を仕留めに行くと、はずしたときの隙が大きくなる。自分はまだしも、倒れた智恵里に近づかれるのは絶対阻止しなくてはならない。

先ほどの二の舞を防ぐため、今度は守備に重点をおき、相手の動きを予想した置き撃ちで機動力を削いだ。

形勢不利と悟ったのか、赤毛の少女は鉾先を収めた。

「……あーあ。完全に失敗だね。どっちか片方をとつちめる予定だったのによ」

少女は結わえた髪をさらっと撫でると、陶子と智恵里から距離をおく。奇襲のうまみを喪失した時点で攻撃する意志が半減したのか、途中から消極的な立ちまわりだった。

「貴女は何者なの？」

智恵里が吐き気をこらえながら尋ねる。

「あたしは佐倉杏子。まっ、名乗るほどのモンじゃないんだけどさ」

口からキャンディーを取ってしゃべる。唾液でてらてらと濡れ光る莓味のキャンディーは、杏子の瞳とおなじ緋色だった。

「もしかして、風見野の魔法少女？」

智恵里がその名前を出したとたん、杏子の表情に苦いものが見え隠れした。

「あたし、貴女の名前を聞いたことある。その筋では有名だからね」
「へえ、そいつは光栄だね」

ちっとも光栄には思っていない口調で、杏子は吐き捨てる。鋭い目つきで、青ざめた表情の陶子と、あごを抑えながらうめく智恵里を交互に見比べた。

このまま智恵里が戦線に復帰したら、杏子はがぜん不利になる。手痛い一発を入れたものの、パワーファイターである智恵里の守備力なら、その程度の攻撃はすぐに回復する。

長年の経験から情勢悪化を悟ると、奥歯でキャンディーを噛みつぶした。

「今日のところは退いてやるよ。二対一で正面からやるほど莫迦じゃない」

「杏子……」

陶子が沈鬱な表情を浮かべる。

「……次はこうは行かないからな」

杏子は敵愾心のこもった捨て台詞を吐くと、脅威的なジャンプ力でもって河川敷の土手を飛び越え、夜の街の方へ遁走した。

陶子はその後ろ姿を凍てつくようなまなざしで睨みつけると、嘆息して戦闘モードを解除し、智恵里に腕を貸した。

3話

陶子の自宅は、見滝原と宿輪台のちょうど中間にあるマンションの一室だった。

大理石の石畳、オートロックの自動ドア、ラウンジに吊された豪勢なシャンデリアなどから、世事に疎いみぞれの目にも、相当の高級マンションであることが伺い知れる。

「ここよ。何もないとこだけど」

「お、お邪魔します」

上ずった声で靴を脱ぐ。

陶子のうちにあがるのは初めてだ。

なんだか緊張する。

靴、ずっと履いてて足臭くなつてたら嫌だな。廊下汚しちゃうし、嫌われるから。

そんな妙な気後れから、みぞれは最初つま先だけで歩き、陶子から変な顔をされた。

「なにそれ、みぞれってアホだねえ」

あとでその話をする、陶子と智恵里から笑われてしまった。

「気にしすぎよ。うちの廊下なんて、そこまできれいなものではないんだから」

「みぞれって意外と気にしいなんだね」

「うつ……」

「ほら、そうやってすぐ気にする」

智恵里に重ねて突っ込まれ、みぞれは頬を赤く染めてうつむく、

「ああ、もう可愛いなあ」

「ひゃう！」

智恵里に抱きつかれ、みぞれは目を白黒させる。こんな風にボデイランゲージをされるのは慣れていない。

「ほら智恵里。千秋さんが困ってるわ」

「何を困ることがあるのさ？」

「ひつつくのをやめなさい」

「あれれ？　もしかして嫉妬？」

「バカ言わないの。脳震盪起こして頭がへんになってるんじゃないの？」

「もともとぱっぱらぱーですよん」

智恵里がおどけて変顔をした。

そのひょうきんな態度に、それまで険しい表情だった陶子の頬が緩んだ。佐倉杏子の襲撃に心を悩ませているらしく、ずっと思い詰めた様子だったのだ。

智恵里先輩、さすがだな。

にやははとユルク笑う智恵里を横目に、みぞれは陶子が淹れてくれた緑茶を飲んだ。

「ごめんなさいね。二人を招待するのなら、あらかじめロールケーキでも買っておいただけど、こんなものしかなくて」

「そんな。すつごく美味しいです！」

陶子が出してくれた冷蔵庫の芋ようかんは、ほこほこしてほつぺたが落ちるほどの美味しさだった。渋めの緑茶と一緒に食べると最高にマツチした。

「さすがに今夜襲撃してくることはないと思うけど、しばらくは警戒が必要ね」

「だね。あんにやろ、人のシマにちょっかい出してきてさ」

「シマ？」

「魔法少女にはね、それぞれ自分が分担する地域があるの。わたしたちは同一のニッチを占めてるから、奪い合いが起こらないようにするための不文律の協定があるのよ」

「はあ」

今ひとつ要領を得ないみぞれのため、智恵里がもう少し分かりやすく敷衍した。

「要するに、一つの街に居られる魔法少女には限りがあるって話だ

よ。魔法少女は魔女を倒したときに得られるグリーンシードを使って、自らのソウルジェムを浄化する必要がある。だから、なるべくなら魔女を自らの手で討伐したいのさ」

「おなじ街に複数の魔法少女が居ると、魔女から得られるグリーンシードを狙って争いが起こりやすくなるの。だから、魔法少女は不毛な競争を避けるため、お互いに一定の距離をおいて生活しているケースが多いのよ」

「なるほど」

二人の説明を聞いてようやく腑に落ちた。魔女との戦いだけでなく、その収穫物をめぐって魔法少女同士でも争いがあるのだ。

「佐倉杏子が有名ってのはそういうこと。彼女は以前にも別の魔法少女の縄張りを荒らしてグリーンシードを横取りしてるんだ」

「札付きのワルなんですね」

みぞれが相づちを打つ。

「ワルかどうかは意見が分かれるわね。でも確乎たる己の信念を持っているのは、魔法少女として大事なことよ。心を強く保たないと長くはやっていけないから」

「たしかにあいつ、なかなかの手練れだったね。サシで戦ったら不利だな」

「不利どころか……」

陶子が気落ちした声で言いかける。

不利どころか、一対一なら確実に負ける。

陶子はそう言おうとした。

だが、

「さ、三対一なら？」

突然会話に割り込んできたみぞれに、陶子と智恵里は水をさされた様子で黙る。

「もし、私が魔法少女になったら？」

もし、魔法少女となって、先輩たちと一緒に戦うことが出来たら。そのときは、園芸部の仲間として……

「千秋さん」

みぞれの言葉を遮るようにして、陶子が強い口調で言い渡した。

「魔法少女として戦うことは、大変な覚悟が要る行為なの。キユウべえに何を言われたかは知らないけど、安易になろうとしないでくれるかしら？」

「そんな、私……」

「いい、千秋さん？　魔法少女というのは、傲慢な存在なのよ。どんな切実な願いだろうと、他人のための祈りだろうと、安易な奇跡に頼ろうとした時点でおなじだけの対価を支払わされることになるの。それが魔法少女を志した者への報い」

対価。

報い。

何気なく口にした陶子の言葉が、みぞれの胸に重くのしかかる。

「よしなよ陶子」

「ご、ごめんなさい。わたし、そんなつもりじゃなくて。ただ……自分の口調の異様に気づいたのか、陶子のはっとして青ざめた様子で口をつぐんだ。

「陶子。顔色わるいぞ」

「ええ。少し疲れちゃったみたい」

机の下でさりげなく智恵里が手を伸ばし、陶子の震える手を握つてなだめる。

二人の親密な雰囲気、みぞれはかあつと赤面して、大慌てで芋ようかんを食べようとして、げふんげふん咳き込んだのだった。

来海宅を出たのは、夜遅くなつてからだ。親には部活の先輩のところで勉強を見てもらっていると連絡をしてある。

泊まっていたら、と陶子に誘われたが、さすがに帰らないと変に思われるので、十時半頃お暇した。

「夕食までご馳走になってすみません。パスタ、すごく美味しかったです」

「そう言ってもらえるとつくった甲斐があったわ。良かったらまた食べにきて」

「はい、是非！」

陶子が玄関先まで見送ってくれる。

「んじゃ、帰ろうか」

マンションから一歩外に出ると、智恵里がうつんと腕を伸ばして肩をほぐした。ああ食った食った、とくちくなったお腹を撫でる。

「大変な一日でしたね」

「けど、厄介なのに目えつけられちゃったな。陶子もこの先、どうする気なんだか」

「変わった子でしたね」

みぞれは杏子の言動を思いだす。

二対一になったとき、少し弱気になったような感じがした。つまり、彼女は完全な一匹狼で、助太刀に来てくれるような仲間の魔法少女はいないということだ。

もしかすると、陶子や智恵里のような二人一組の魔法少女は珍しいのだろうか。

「そうでもないよ。キュウベえの野郎に言わせると、最初のうちは心細さからほかの魔法少女とつるむ子は多いんだとさ」

「最初のうち？」

「……まあ、色々あるからね。魔女から得られるグリーンフィードには限りがあるし、魔法少女を続けるうちに色んな裏事情を知って、仲間割れしたりしてね」

「なんだか世知辛いですね」

「ね」と智恵里がわざと軽く言った。

「でも、そうなる先輩たちがずっと仲良くやっていけるのは凄いことなんです」

「どうだか……ね」

智恵里は一瞬寂しそうな顔をした。それからしばらく無言になる。

智恵里はみぞれの数歩前を歩きながら、ときどき油断なく目を細める。どうやら周囲の魔力や気配を察知して、バックアタックを警戒しているらしかった。

「一応、ね。陶子に比べるとあたしなんかの察知力はたかが知れているけどさ」

「そうなんですか？」

なんとなく意外に感じる。

戦闘面では、一転突破の攻撃力が特徴の陶子に比べ、智恵里は細やかな対応力が目を引く。どちらかという、智恵里が先輩魔法少女のような印象を受ける。

「まさか。陶子は小学生の頃から魔法少女をやってる古参だよ。あたしなんて、まだなつて一年そこそこの新米だからね」

「小学生？」

「陶子は早熟だったからね。あいつに言わせると、魔法少女つてのは思春期の女の子が適任なんだとき。小学生の頃なんか、あたしなんて男子と毎日ドッジボールに明け暮れてたもん。思春期のしの字もなかったね」

快活ではきはきとした短パン姿の智恵里が、クラスの男子に混じってどろんこになって遊ぶ姿が容易に想像できる。

きつと女がき大将だったんだろうな、とみぞれは微笑ましく思った。

「でも、小学生の陶子先輩は、何を願って魔法少女になったんですか？」

疑問に思つて尋ねる。

小学生の夢となると、やはり他愛もないものなんだろうか。自分が小学生の頃は、よく美味しいケーキが食べたいと神様をお願いした。陶子も、似たような願いで魔法少女になったんだろうか。

「あー、みぞれには話してなかったか」

智恵里は頬を掻くと、

「陶子はね、小学六年生の頃、目の病気で視力を喪つたんだ」

「視力を？」

「正確には全盲じゃなくて弱視なんだけどね。それでも、日常生活を送るのが困難なレベルだった」

「じゃあ、テニスを辞めたのは……」

「うん。興味をなくした、つてのは建前で、実際は続けられなくなつたのよね。まあ、今は本当に興味なさそうだけど」

将来有望なジュニアプレーヤーだった陶子は、視力を失うにつれ、テニスにかかる情熱を喪失した。目が弱ってからほとんど家から出ることなく、趣味の音楽鑑賞と園芸を細々と続けていたそうである。

「そこにキュウベえがあらわれて、陶子に契約を迫つたの。魔法少女として魔女と戦う運命を受け入れる代わりに、現代医学では治らない目の病を癒した」

「……」

みぞれは俯きながら、智恵里の話を聴く。

陶子にそんな過去があったとは知らず、テニスをやらないなんて勿体ないなどと口走った自分が恥ずかしくてならなかった。

「仕方ないよ。みぞれは知らなかったんだから。陶子だってぜんぜん気にしてないし」

智恵里にフォローされ、みぞれは曖昧にうなずく。

そうこうするうち駅が見えてきた。電車が来た直後なのか、改札口から疲れた顔の会社員やOLが続々と吐き出され、しんしんとした街に散らばってゆく。

帰る方向が反対なので、智恵里と階段のところでバイバイした。

みぞれはがらんとしたホームに立ち、電車が来るのを待った。

二人が帰ったあと、陶子は流しに立って汚れた食器を洗った。スポンジに中性洗剤を垂らし、泡立てながらフォークとお皿のオリ―ヴオイルをていねいに落としてゆく。

かけっぱなしにしてある部屋のCDプレーヤーが止まったので、

別のCDを入れようと思い、エプロンで手を拭きながらCDラックに目を通した。

点字の貼ってあるラベルを手にとって、陶子はしげしげと眺めた。今となつては無用の長物だが、剥がすのはしのびなく、貼ったままにしてある。

小学生の頃、命綱のような気持ちで、必死に点字用タイプライターでラベリングした。あらゆるものに点字を貼ることで、目が見えなくなる恐怖と戦おうとした。光無き世界に秩序を与えようとした。拙いながらも、日々狭くなる一方の世界をなんとかして食い止め、支えようとした。

あの頃に比べるとずっと臆病になった、と陶子は感じる。少なくとも、あの頃の自分は目の前の恐怖に立ち向かおうとした。その身に降りかかる受難を、全身全霊をもって受け止めようとした。

だが今は……

今の自分は、ただの卑怯者だ。

陶子の指が見覚えのあるCDのラベルに触れた瞬間、聞き覚えのある声がした。ヴィヴァルディの『四季』をあらわす点字が指先にこつこつ触れる。

四年前とまったくおなじ状況に、陶子は強い既視感に見舞われた。

「やあ陶子」

「何しに來たの？」

後ろを向いたまま、陶子が硬い声で言った。

「やれやれ、キミたちは本当につれないね」

「わたしの前によく顔を出せたものね」

温かみの欠片もない陶子の口調にも、キュウベえはまるで動じる様子がない。いや、今までこの生き物が一度だって喜怒哀楽を表したことがあったかどうか。

「一体何のことだい？」

「とばけないで。貴方が佐倉杏子を宿輪台へ招き寄せたんでしょ」
「今日の戦いは、杏子が自ら望んで行動した結果だよ。そこにボク

の意思が介在する余地はないね」

「情報を流したのは否定しないのね」

「否定したところで、キミがそれを信じるとは思えない。だったら、ボクがどう答えようとおなじことさ」

キユウベえは答えはぐらかしながら、窓辺へと歩み寄る。

月光がガラス戸を透かしてさし込み、キユウベえの真っ白い体毛が銀色に染まる。振り返るキユウベえの赤い瞳が、微笑んでいるように見えたのは目の錯覚だろうか。

「佐倉杏子に何を吹きこんだの？」

「吹きこむとは人聞きがわるいね。ボクはただ訊かれたことを答えただけさ」

「……」

「宿輪台に、お互いの魂を共有しあつた魔法少女がいる、という話をね」

キユウベえは淡々と告げる。

陶子の胸にうつすらと殺意が萌した。

「わたしたちの邪魔をするのね」

達者な口ぶりで誤魔化そうとしたところで、キユウベえが杏子に情報を与え、陶子たちの「目的達成」を邪魔しようと仕向けていることは間違いない。

その行為の是非を問うのは無意味だ。

キユウベえの行為に、人間の善悪の価値観を当てはめるのは不毛だ。

感情を持たない彼の行動に、私情がさし挟まれることはない。したがって今回の一件も、陶子たちに対する怨みや悪意ではなく、何か別の、彼らにとって有益な理由があるとみていい。

……分らない。

陶子は唇を強く咬んだ。

キユウベえの究極的な目標は明白だ。

だが、そこに至るまでの中間目標の見当がつかない。佐倉杏子を

そそのかして、何を企んでいるのだろうか。

キユウベえが帰ったあと、陶子はシャワーを浴びてベッドに寝そべると、自身のソウルジェムを手にとって月光にかざした。

視力を取り戻した瞳で、初めてこの白く輝く宝玉を目にしたとき、なんて美しいんだろうと感動したものだ。

今となつては、自分自身の無邪気さに強烈な怒りを覚える。

美しいのは当然だ。

それは、陶子の命そのものだったのだから。

疑うことを知らない小学生の、生命の粋を集めた輝きだったのだから。

キユウベえによつて自分の魂を抜かれていとも知らず、幼い陶子は喜んだ。

とつておきの宝物を手にした夢見る少女のような自身の振るまいを思いだすたび、虫酸が走つて頭がくらくらしした。

純真無垢だったからこそ、何よりも切実な願いだったからこそ、その選択を選んだ自分自身のあやまちを陶子は許せない。

今、かつて純白だったソウルジェムは、黒い穢れを溜めこんでどす黒くに濁っている。月明かりに透かしてみると、宝石の内部に黒いもやが沈着しているのが分かる。

「まるで今のわたし自身ね」

自嘲気味につぶやくと、陶子はソウルジェムを指のはらで撫でる。キユウベえが邪魔をするようなら、決行を早めなくてはならない。智恵里の助言どおり、一切の迷いを捨て、わたしはわたしのためにすべきことを為すべきだ。そうしないと、これまで積み重ねてきたものがすべて無駄になる。

そう考えたとき、目の前のソウルジェムがひとときわ暗く曇ったようない感じがした。

翌日、みぞれは学校を休んだ。

朝目が覚めると、体調があまりよくなかった。喉が痛かったし、

少し頭の後ろらへんが重い気がした。

決して学校に行けないほど辛くはなかった。市販のかぜ薬を呑んで行ったら、二時間目にはけろつと治る程度のだるさだ。

だが、みぞれはかぜの症状を大げさに言って学校を欠席した。

ママ、ごめんね。

娘の体調が優れないので、と職員室に電話する母を横目に、みぞれは体温計を腋に挟んだ。ピピッと音が鳴って体温計が平熱を伝えただが、みぞれはわざと高めの値を申告した。

やがて母がスーパーのレジ打ちのパートに出かけると、みぞれはおもむろにベッドから這い出し、服を着替えた。

補導されるとまずいので、少し大人っぽい服装にした。とはいえ、中学生にしては小柄なみぞれでは、どう逆立ちしたところで女子大生を演じるのは無理なので、せめて小学生に思われない程度のお洒落はしておく。

家を出たみぞれは、学校とは正反対の方向へ歩きだした。

歩きながら心の中で強く呼びかける。

そこに居るんでしょ、キュウベえ。

お願い、出てきて。

「呼んだかい？」

と、草むらから鎌首をもたげるようにしてキュウベえがあらわれた。

以前のみぞれだったら驚愕しただろうが、今となっては驚くに当たらない。この不可思議な生物は、みぞれを魔法少女に勧誘するべく、四六時中見張っているのだ。

薄気味わるくはあるが、声をかけると速攻で返事がかえってくるのが有難い。わざわざ探しに行く手間が省ける。

「佐倉さんの居場所を教えて」

「それを知ってどうするんだい？」

「会ってお話をしたいの」

みぞれが力強く言くと、キュウベえは能面のような顔で首をかし

げる。

「先輩たちを襲うわけを知りたい。おなじ魔法少女同士で傷つけ合うなんて、そんなのつらすぎるから……彼女をとめたいの」

「腹を割って説得したらどうにかなると、キミは本気で信じているのかい？」

「それは……」

みぞれは口ごもる。

「まあ良いさ。杏子のもとへ案内するよ。それでキミの気が済むのならね」

「ありがと、キュウベえ」

こつちだよ、とキュウベえが四つ足でてくてく案内する。

佐倉杏子に接触するのは危険な賭だ。

相手は同僚（？）の魔法少女へ攻撃を仕掛けるような物騒な人物だ。身分を明かして近づこうものなら、最悪人質に取られる可能性だってある。

でも……

それでも、とみぞれは考える。

言葉の通じないバケモノならともかく、相手は普通の十代の女の子だ。

おなじ中学生同士なのだから、誠意をこめて説得したら気持ちだつて通じるはず。

「うん。きっと話せばわかってくれるよ」

かつてその発言をした人物が、問答無用に射殺された事実など知るよしもなく、みぞれはぎゅっとこぶしを握るのだった。

キュウベえが案内した先は、駅前の商店街にあるゲームセンター

「エディプスプラザ」だった。

「ここに佐倉さんがいるの？」

みぞれはこわこわと店内を覗きこんだ。

この店には、小学生の頃、友達と一緒に何度か遊びに来たことがある。

と言っても、みぞれの目当ては店の入り口付近にあるUFOキャッチャーのクマのぬいぐるみで、実際に店の奥まで入るのは初めてだった。

店内は薄暗く、ゲーム機の筐体から流れるBGMが重なりあつて騒々しい。和太鼓型の音ゲーに興じる大学生や、大あくびで脱衣麻雀をする外出中のサラリーマンなどがちらほら見受けられる。

「ほら、あそこだ」

店内の最奥、古いアーケード筐体が並んでいる一角に、佐倉杏子の後ろ姿が見えた。

この前の臙脂色の戦闘服ではなく、浅黄色のざっくりとしたセーターにホットパンツの普段着だ。

「どうしよう」

ゲームに夢中になっている杏子を前に、みぞれは困って立ち尽くした。

ここまで来たものの、実際に会ったら何をどうしようかとは考えてこなかった。

うつ、私バカすぎ……

自分の無計画さを呪いながら、みぞれは意を決してそれとなく杏子に声をかける。

「あ、あのう」

「話かけんな。気が散る」

「あ、う」

みぞれはすぐすごと退く。

アーケードの筐体の画面が切り替わって、杏子の顔が青白く照らし出される。

ラウンド2の文字が画面中央に表示されると、杏子の表情がみるみる鋭さを増した。

杏子がプレイしているのは、一昔前の対戦型格闘ゲームだ。店内

対戦の途中らしく、ラウンドが始まると反対側の筐体からもレバーを激しくガチャる音が聞こえてくる。

前のラウンドも杏子が勝利したらしく、対戦相手のテコンドー使いが、必死に杏子の操る女空手家を攻め立ててくる。

「甘い」

杏子は八重歯を向きだしにして笑うと、相手が大技を繰り出した直後の隙を衝いて一気に飛び込み、連携技を叩き込んだ。

三分の一ほど残っていた体力ゲージを一気に削られ、テコンドー使いが倒れる。

K・Oされた反対側のプレイヤーが苛立った様子でコンソールを叩き、舌打ちして店から出て行った。

杏子はひゅうと口笛を吹いて冷やかすと、勝利の余韻に酔いしれながら口にくわえたポッキーを食べた。

「で、あたしに何の用？」

「あの」

みぞれは膝をもじもじして言い淀んだが、やがて凜とした表情で、

「私、千秋みぞれといいます」

「知ってるよ」

「へ？」

思わず気の抜けた声が出る。

「あいつらの後輩だろ」

あいつら、というのは陶子と智恵里で間違いないだろう。みぞれは小さく肯く。

杏子は訝しげな目でみぞれをじろじろ見つめた。何か裏があるのかと疑っている。そんな目つきだった。

「よく一人でのこのこ来たもんだ」

「私、知りたいんです。どうして佐倉さんが、陶子先輩たちを襲ったのか。だから、今日はひとりで来ました」

みぞれが力強くそう言うと、杏子は毒気を抜かれた様子で眉をひそめる。

「おまえ、何も知らないのか？」

「はあ」

座んなよ、と杏子が目の前の椅子を勧めてくれたので、みぞれは腰をおろした。煙草の灰が落ちて表面のビニールが破れた丸椅子は、座るとお尻がちくちくした。

「おおかた、魔法少女を正義の味方が何かと勘違いしてんだろうけどさ」

「違うんですか？」

「違うね」

杏子が即答して、ポツキーの二つめの袋を破る。

食うかい、とさし出されたので、みぞれは有難く一本頂くことにした。

「魔法少女ってのはさ、あんたが思ってるほど立派なもんじゃない。あたしはもちろん、あんたの先輩たちだってね」

「そんなことないです」

「どうして言いきれぬのさ。あんたは、あいつらの何を知ってる？」

杏子に淡々と言い返され、みぞれは言葉に窮した。

杏子はこめかみに手をやると、古傷をえぐられるようなしかめっ面を浮かべる。

「あたしはね、この街に落とし前をつけにきたんだ。あいつの、来海陶子の企みを阻止するために」

「先輩と知り合いなんですか？」

杏子は首を縦に動かした。

曖昧な肯定。

落とし前、というのが陶子を殺すことだと気づき、みぞれはぐっと息を呑んだ。

「そんな……どうして？」

「あんたには関係のないことさ」

「彼女たちが魂の共有者だからだよな？」

ゲーム機の筐体の上からキュウベえが口を挟むと、杏子はちつと

舌打ちした。

「魂の共有者？」

「魂を共有し合う魔法少女のことだよ。お互いの心の領域を解放し、精神状態や思考などを同じくすることで作為的に共依存の関係を構築できる」

「てめえは黙ってろ」

杏子が低い声で恫喝する。

「魔法少女は、通常、一匹狼の場合がほとんどだ。高次消費者である彼女たちは、猛禽類や大型爬虫類同様、群れるよりかは各自の縄張りを築いてそこで狩る方が効率的だからね。自然とその傾向になる」

「一匹狼……」

「だが、感情という不安定な要素を持つ彼女たちが、必ずしも最適な行動を選択するとは限らない。むしろ多くの第二次性徴期の少女たちは、孤立を嫌い、個を恐れ、集団という匿名性の中へ自らを隠そうとする」

キュウベエの言っていることの意味は半分も判らなかったが、女子は群れたがる、というのはなんとなく理解できる。

みぞれのクラスでも、女子は何らかの集団に属していて、休憩時間トイレに行くときは、一緒に行くのが習慣だった。

「そうした矛盾を抱える魔法少女たちは、仲間を強く求めながらも、やがて反撥し合い、袂を分かつことになる」

「黙れ」

「現に杏子だつて……」

「黙れつてのが分かんねーのか？」

杏子がドスの利いた声でキュウベエの胸ぐらを掴んだ。

「やめて佐倉さん！」

みぞれがキュウベエを庇うと、杏子是不快な表情でふんと鼻を鳴らし、キュウベエを手放した。

「とにかく、あたしは陶子を止める。最悪、殺すことになるうとね」

「そんな真似させない！ 佐倉さんがあくまで攻撃をやめないなら、私だって」

「魔法少女になるってか？」

杏子がぐつと顔を近づけて挑発する。

その胆力に気圧されながらも、みぞれは健気にぶるぶる震えながら睨みかえした。

「やめときな。あんたみたいなのは、魔法少女に向いてないよ。他人のコトに構いすぎるやさしいやつはさ」

ぶい、と視線をそらすと、杏子は興を削がれた様子で大きく腕を伸ばした。

「あーあ、やる気なくしちゃったよ。せつかくの快勝が台無しだ」
頭の後ろで組むと、白けた様子で店から出て行こうとした。

「待って、私まだ」

みぞれが呼びとめようとすると、杏子が背を向けたまま立ち止まる。

「千秋みぞれ」

「……」

「これやるよ」

杏子が放って寄越したポツキーの箱を、みぞれは間一髪でキャッチした。

「へ？」

一瞬、ポツキーの箱に目を奪われた隙に、杏子はその場から颯爽と消えた。

初歩的な視線誘導にまんまと引っかったのだった。

4 話

教室の半開きの窓から柔らかな晩春の風が吹きこんでくる。

みぞれはうつらうつらしながら、板書された英語の長文を書き写した。

日本人留学生のケイコが、ステイ先のマイクやエリーに自国の文化を紹介する、というくだらない内容だ。

眠い……

みぞれはあくびをかみ殺した。

ここ最近、夜になるとあれこれ考えてしまい、慢性的な寝不足気味だ。

「では千秋さん。黒板に書かれた文章を前に出て訳してください」
さかんにあくびをしているのを先生に見とがめられたのか、あてられてしまった。

頑張れ、と隣の席の子が小声で応援してくれたが、ろくに予習をしてきてないので、英単語がところどころ分からない。

しどろもどろになって、見よう見まねで翻訳する。が、文章の途中で突然分からない単語が出てきて焦った。

く、くにふ？

チョークを手にして硬直する。

くにふでペンシルをシェイプするしかかったが、シェイプ自体よく分からない。とにかくくにふの存在が謎すぎる。

諦めて先生に聞こうとしたとき、廊下側の窓からこっちを覗き込んでくる陶子に気づいた。みぞれが視線を向けると、ウィンクで合図を送ってくる。

どうやら体育の授業の教室移動中らしく、みぞれが壇上に立たされているのに気づいて覗き込んだらしい。

陶子が口だけを動かして、みぞれに何かを伝えてくる。

ナ、イ、フ。

三つの単語がみぞれの脳内で意味をなし、みぞれは「あ！」と閃きの叫声を発した。

「どうかしましたか、千秋さん？」

「な、なんでもないです」

先生が教科書から顔を上げると、陶子が素早く窓から首を引つこめる。

先輩、ありがとうございます。

みぞれは内心陶子に感謝しつつ、素知らぬ顔で本文和訳を続けるのだった。

「先輩、助かりました」

放課後、学校の屋上で陶子に会うつ、みぞれはいの一番にお礼を言った。陶子の助言がなかったら、みんなの前でくにふと読んで赤っ恥を搔くところだった。

「千秋さん、もう少し英語の勉強をした方が良いわね。このままだと、じきついていけなくなるわよ」

「今日痛感しました……」

「今度、良かったらまたうちに来てくれるかしら？ お茶でも飲みながら、一緒に英語の勉強をしましょう」

ジョウロを手にした陶子が、たおやかな笑みを浮かべて誘ってくる。

「そうね。智恵里も誘って、三人でケーキでも食べたいわね。うちの近所に評判のロールケーキの店があるの。フルーツが一杯入って、とっても美味しいのよ」

以前だったら一も二もなく「行く！ 行きます！」と鼻息も荒く答えていたところだ。だが、今となっては返事を躊躇せざるを得ない。

「どうしたの？」

「いえ、その」

「千秋さんらしくないわね」

陶子が頬に手を添えて考える素振りをする。

そしてやや表情を引き締めると、

「もしかして、またキュウベえに何か言われたの？ 魔法少女になつてくれ、的なの？」

「えと……はい。言われました」

嘘ではない。キュウベえに勧誘されたのは事実だから。

だが、みぞれの心に引つかかっているのは杏子との一件だ。

陶子はみぞれが杏子と接触したのを知らない。もし知ったらどんな反応をするんだろうか。みぞれは内心後ろめたく思いながら、全部キュウベえのせいにした。

「千秋さん。キュウベえとは、あまり関わらない方がいいと思う。

あいつは、わたしたちを魔法少女に仕立てるのが仕事だから」

「仕事なの？」

「ええ。ああやって奇跡を売って歩くのが、彼らのやり口よ」

「彼ら？」

みぞれの問いに答えることなく、陶子は屋上の隅にある水道からジヨウ口を水で満たした。

「ねえ千秋さん。わたしがどうしても魔法少女になったか、知ってる？」

「智恵里先輩から聞きました」

「そう」

きゅつと蛇口を締める音が響く。締めりのわるい蛇口からはなおも数滴のしずくが落ち、洗いざらしの土ふるいを濡らした。

「小学生の頃、視力を喪ったの。少しずつ光りを感じなくなつて、仲良しだった友達や、家族の顔がどんどん暗く見えなくなった。この世界で、自分ひとりが永遠に続く闇の中に取り残されたような気がした」

屋上の鉢植えに水を撒きながら、陶子は恬淡とした調子で語る。

「それでキュウベえと？」

「ええ、契約したの」

水を浴びたパンジーやヴィオラが、水滴を弾いて生き活きとする。園芸部によって丁寧に整えられたプランターの花壇からは、ぬれた腐葉土のいいにおいがした。

「美しい草花。朝日や夕日。家族や友人の笑顔。そういうものをふたたび見られるのなら、魔法少女として戦う運命を受け入れてもいいと思った。どんなに辛くても、みんなを守るためなら頑張れると思ったの」

陶子の頬に濃い陰翳がきざした。切れ長の瞳が苦悩と憎悪と呪詛で満たされる。

「……バカよね。とんでもなく無邪気で、同時にとんでもなく愚かったのよ。自らの些末な欲望を叶えるために、魂を悪魔に売ったのだから」

と、陶子の瞳がかつと見開かれた。

膝がかくんと落ち、表情が苦悶にゆがんだ。

突然発作を起こしたらしく、くうとうめき声を洩らし、陶子は体を二つに折った。手から転がったジョウロが投げだされ、とくとくと水が流れて水溜まりができる。

「先輩！」

「平気よ、ただの悪寒だから」

陶子は首を振るが、とても単なる悪寒には見えなかった。脂汗を垂らし、身をひき裂かれるような苦痛にあえいでいる。

「陶子！」

と別の場所で作業中の智恵里が血相を変えて駆けつけてきた。

「大丈夫？」

「ええ……なんとか」

智恵里は陶子を抱きかかえた。そらした頤に沿って陶子の胸もとに指を入れてまさぐり、黒く濁った宝石を引きだした。

「どう？」

とあごをそらしたまま陶子が上目遣いに尋ねる。重病人が、それと知りつつ見舞い客に自分の容体を尋ねるような、どこか底意地の

わるい口調だ。

「かなり進行してる。もうじきだ」

「そう」

そう言うと、陶子のがくつとした。意識が朦朧としている。

智恵里は陶子を抱きかかえたまま、みぞれの方をちらと見ると、

「みぞれ。陶子のために飲み物を買ってきてくれる？ お金はあとで渡すから」

「す、すぐ買ってきます」

二人の動きに見とれていたみぞれは、はっとして駆け足でジュースを買いに走る。

だが、頭は冷静なままだ。

なんとなくだが、妙な確信がある。

体よく人払いされた。

おそらく、これから行われることをみぞれに見せたくないのだ。

見るべきじゃないのは分かってる。

見たらきつと後悔する。

だけど……

……

みぞれは屋上のドアから出て行くふりをして、素早くドアの反対側に隠れた。

普段の智恵里の洞察力なら容易く看過されただろうが、陶子の手当てに夢中のため、みぞれの動向にまで気を配ってない。

「陶子」

智恵里は目を細めると、陶子のうつすらと汗ばんだ頬に手を添えた。

「すごい汗」

頬を伝って流れる汗を指で掬い取ると、指ですり潰すようにした。

「陶子の汗、さらさらしてる」

智恵里はうつとりとした口調でそう言うと、自らの制服のブラウスの袖をたぐって、手首に嵌めてあるソウルジェムを出した。

「ほら、あたしのこんなに熱くなってるよ。陶子のおんなじくらい熱い」

智恵里は自らのソウルジェムを、陶子のソウルジェムに重ねた。二つの宝玉が共鳴し、きいんと耳の痛くなるような音が鳴り響く。細動する黒と白の石がお互いに触れあって、かちかちかと鳴った。な、何をしているの？

扉の陰に隠れたみぞれは、息をするのも忘れて二人の秘匿された行為に見入った。

「もう少しだから」

智恵里が優しく陶子の胸を撫でる。

陶子のソウルジェム内の混濁が、智恵里のソウルジェムの中へと吸い込まれてゆく。

白のソウルジェムは本来の輝きを取り戻し、逆に黒のソウルジェムはその黒々とした色味をいつそう増した。

「これでよし、と」

智恵里によってソウルジェムの穢れが祓われ、陶子の呼吸がだんだんと鎮まってゆく。

「あはっ、あたしのもう真っ黒だ」

智恵里が自らのソウルジェムを日射しに照らした。黒く禍々しい穢れが内部でうねり狂い、今にも表面を割って黒くどろどろしたものが噴出しそうな具合だ。

「智恵里……」

「辛いんですよ？ 目え閉じてなさい」

陶子は潤んだ瞳を智恵里に向ける。

何か囁いているが、みぞれの場所からはその内容までは聞き取れなかった。

そろそろ戻らないと拙い…… よね？

みぞれは内心の動揺を悟られまいと、手鏡で表情を確認すると、鞆の中からジューズを出して何気なく持って行った。

「あ、あのジューズ買ってきました」

「サンキュー」

「あ、陶子先輩どうぞ」

智恵里が手を伸ばしたのを無視して、みぞれは陶子に直接ジュースを渡した。

「あ、ありがとね」

陶子はよほど喉が渴いていたらしく、さし出された生ぬるいオレンジジュースをごくごくと一気に飲み干した。

ふう、危ない。

みぞれは内心胸を撫でおろした。

智恵里にジュースを手渡したら、缶がぬるいことに気づかれる。下の自販機まで買いに行ったのではないことが露見してしまう。

陶子の方は意識が朦朧としていたから、智恵里がみぞれに下した命令をろくに聞いてなかったのだろう。案の定、中身がぬるいのなどまるで気にすることなく、全部飲んでしまった。

「はあ。生きかえったわ」

「お役に立てて幸いです」

「ええ。それじゃあ、仕事の続きを」

そう言って立とうとした陶子を、智恵里はやんわりと押しとどめる。

「だめだめ。今日の部活はおしまい。ただでさえフラフラなんだから、これ以上体動かしたらぶっ倒れちゃうよ」

「陶子先輩、なんなら保健室に行った方が……」

みぞれは白々しく心配してみせる。

「ううん平気よ。でも、そうね。今日の部活はここまでにしておきましょうか。また倒れてしまったら迷惑をかけるものね」

念のため、陶子は保健室で少し寝ていくことになった。まだ足もとが覚束ないんだし、帰る前に少し休んどきなさい、と智恵里に申し渡されたのだ。

陶子を保健室まで連れて行くと、みぞれと智恵里で後片付けをすることにした。

赤玉土や腐葉土の袋をかたし、作業用の青いビニールシートを置んだ。

屋上の床に散らばる小さな塵芥を竹箒で掃き清めてゆく。本来、園芸部の所有地ではない場所を使わせてもらっているので、作業のあとは徹底的な清掃が欠かせない。

片づけ作業中、みぞれと智恵里はほとんど口を利かなかった。智恵里の物腰が硬くよそよそしく、話しかけづらい。

どうしょ。気まずいな。

ゴミ袋を捨てに下へ降りようとする智恵里の後ろから、道具を抱えたみぞれがよたよたについてゆく。

掃除も済んだことだし、今日は先に失礼しようか。

「みぞれ」

「どうかしましたか？」

「あんだ、覗いてたね」

智恵里がゆっくりとこちらを振り返る。

表情自体は普段と変わらない。

だが、その目つきはぎよっとするほど鋭く、いつもの朗らかで柔和な智恵里とはかけ離れた印象だ。

「そんな、私、私」

バレたのか。だが、こんなに早くバレるとは思わなかった。

みぞれの動揺を察したのか、智恵里の声音が疑問から確信へと変わる。

「変だと思ったんだ。あのジュース、下の自販機では売られてない銘柄だったから」

「あ」

おのれの失態を悟り、みぞれは居竦んだ。

ジュースの温度を気にするあまり、初歩的なミスを犯したのだ。よりによって智恵里に、覗き見をしていた事実を知られてしまった。

みぞれはこの場を取り繕おうと、言い訳めいたものを口にしよう

としたが、緊張した喉と舌はからからで、声にならなかった。

「あんた、どこまで見たの？」

「あの、先輩たちが……石を重ねて、それで陶子先輩が元気になつて……」

弱気で訥々と弁明をするうち、みぞれの心の中にやるせない気持ち切迫してくる。

みぞれはひととき強い調子で、

「先輩、魂の共有って何なんですか？」

「どこでそれを知ったの？」

今度は逆に智恵里の方が狼狽する。

「佐倉杏子に会ったとき、キュウベえが教えてくれました。陶子先輩と智恵里先輩は、魔法少女の中でも珍しい魂の共有者だ」と

みぞれがすべてぶちまけると、智恵里の表情が驚愕に満ち、続いて激昂に彩られた。

「あんた、あの女と会ったのっ！」

「先輩！ わ、私は先輩たちのことが……」

智恵里の表情が硬くなる。

陶子がときおりみせる、この世界の森羅万象すべてを憎み嫌うような突き放した一瞥。

それとまったくおなじ目つきで、智恵里はみぞれを睨んだ。

みぞれの中で、陶子と智恵里の印象が重なって明確な輪郭を帯びる。

何のことはない。

彼女たちの憎悪は、心を等しく共有する二人が見せる、共通の振る舞いだっただ。

それは、魔法少女として生きることへの絶望と、その絶望へ自分たちを追いやったこの世界への呪詛だった。

「ねえ、みぞれ」

「……はい」

「これ以上、魔法少女の世界に首を突っ込まないと約束して」

「で、でも私」

「それが出来ないのなら、今すぐこの園芸部を辞めなさい。あたしと陶子の前から姿を消して。二度と顔を出さないで」

そして、あたしらのことなんて忘れて。

たぶん、それが一番あんだのためだから。

みぞれに聞こえないほどの小声でそう付け加えると、智恵里は内心の悲痛を憎悪の仮面の下にねじ込み、みぞれを拒絶した。

どうしてこうなったんだろ。

私、ただ先輩たちの傍にいたかっただけなのに、どうして……

自室のベッドに横たわって「どうして？」と「なぜ？」をいつまでも反芻する。が、みぞれの心はそれらの問いを消化することなく、胃の腑の底に重く沈澱してゆく。

愛用のクマのぬいぐるみを抱いてごろんと一回転すると、みぞれはベッドテーブルに置いてある携帯電話を手にとった。

電話帳を開くと、佐倉杏子の電話番号が出てくる。

その画面を眺め、通話ボタンに指をかけたまま躊躇するうち、携帯の液晶画面が暗くなって押すタイミングを見失った。

この番号は、ポッキーの箱の裏側に殴り書きしてあったものだ。

杏子と別れたあと、ポッキーを食べているうちに気づき、携帯電話に登録した。

杏子が何を思ってみぞれに連絡先を残したのかは分からない。みぞれを利用し、陶子たちに危害を加える算段かもしれない。

だが、実際に会って話をした杏子は、理由もなく他人を攻撃するような少女ではなかった。口調や態度こそぞんざいだが、性根の優しい子にみえた。

むしろ、あれほど敬愛し、慕っていたはずの陶子や智恵里が、今は遠く感じられる。

二人がみぞれに隠れて何かを企んでいるのはもはや明々白々だ。陶子が倒れたことから、それは彼女たちに変な負担のかかる行為

であるのは間違いないものと思われる。

「悩んでるようだね」

「キュウベえ」

何の前触れもなく、キュウベえがそれぞれの目の前にあらわれた。ルビー色の瞳が、闇の中で輝いている。

「ねえ教えて。先輩たちは、一体何をしようとしているの？」

「……彼女たちは、自らの中に大量の穢れを溜め込んでいる」

「けがれ？」

「魔法少女にとって、魔女は倒すべき敵であると同時に、大切な魔力の補給源でもあるんだ」

「どういうこと？」

「魔法少女が魔法を使うたびに、その体には少しずつ穢れが溜まっていく。その穢れを、魔女から得られるグリーンフシードに定期的に移し替える必要があるのさ」

「それが溜まるとどうなるの？」

「……人としての心が失われ、二度と戻らなくなるだろうね」

「そんな！」

みぞれは口を抑える。

「残念ながら事実だ。来海陶子、三科智恵里の両名は、長期にわたって魔女討伐を拒み、その身に高濃度の穢れを蓄積している。このままだとじき……」

キュウベえは途中で言い淀んだ。

みぞれはめまいを感じて息を殺した。

陶子たちが、何故そんな自殺行為に走るのか理解できない。

「でも、先輩たち、私が襲われたときは助けてくれた。魔女だって倒したよ？」

「あれは例外中の例外だよ。おそらくキミでなかったら、彼女たちは決して助けたりはしなかっただろうね」

「例外……」

みぞれはキュウベえの言葉を復唱した。

陶子と智恵里の目的がなんなのかは、今なおよく分からない。むしろ前より分からなくなった気さえする。

もしかすると、自分が考えてきたような素敵で優しい先輩ではないのかもしれない。

だが、どんな目的があるにせよ、二人は自らの目的に反してまで魔女を撃破し、みぞれを救おうとしてくれた。

それなら、何を迷うことがあるだろうか。

「私は、先輩たちの役に立ちたい。先輩たちが悩みを抱えているのなら、それを一緒になって悩んで解決したい」

「それなら、ボクと契約し……」

「ううん。私は私のやり方でやるから」

みぞれは意を決して、携帯電話の通話ボタンを押した。

心臓が高鳴るが、ぎゅっと目を閉じて携帯電話を耳に強く押し当てる。

数回のコールのち、陶子の舌つ足らずな応答が聞こえた。

「あ、もしもし佐倉さ——」

「みぞれか!？」

杏子の声はいつになく緊迫したものだった。

「ど、どうかしたんですか？」

「今、自宅か？」

「あ、はい」

「すぐ迎えに行く。仕度して待つてろ！」

「えっ、えっ」

慌てふためくみぞれに、杏子がゆっくりと噛んで含めるような口調で述べる。

「あたしの読みが甘かった。あいつら、お互いの中で穢れをシェアし合って、強制的にあれを孵化させる気でいやがる」

「孵化？」

「あいつらはな、魔女を生み出す気にいるんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2267y/>

魔法少女みぞれ マギカ

2011年11月8日02時04分発行